

第5回熊本大学 東光原文学賞作品集

2013年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library



◆ 大賞 ◆

かんざくら 猫ノ目アキラ

◆ 優秀賞 ◆

欲望の街 坪井 希

幸ノ奥津城 かわひらこ

鳴沢くんの恋人 吉川 真悟

第五回熊本大学東光原文学賞作品集

第五回東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長

森

正人

／ 4

第五回東光原文学賞作品集に序す

大賞

かんざくら

猫ノ目アキラ
／ 7

(法学部法学科四年)

優秀賞

欲望の街

坪井 希
／ 41

(文学部歴史学科四年)

優秀賞

幸ノ奥津城

かわひらこ / 76

(薬学部薬学科四年)

優秀賞

鳴沢くんの恋人

吉川真悟 / 100

(教育学部中学校教員養成課程国語専攻三年)

選考を終えて

西川 盛雄 「『書く』ことは楽しいこと」の発見 / 133

岩岡 中正 「コメント」 / 136

高峰 武 「新しい才能との出会い」 / 138

第五回東光原文学賞作品集に序す

附属図書館長 森 正 人

熊本大学附属図書館は、平成二十四年度の事業として東光原文学賞の作品募集を行いました。学生の皆さんから小説を募り、応募作品のうちから優秀賞三編と大賞一編を選考してこれを発表しました。このたびこれを上梓して広く学内外の読者に供するものです。

この事業の趣旨は、読書への関心を喚起し、日本語の文章を書く能力の向上を図り、あわせて図書館を従来にもまして活用していただき、これらを通じて学生諸君の勉学を広げ、教養を深めていただくというところにあります。今年度は第五回になります。今回も、次の通りほぼすべての学部と一つの大学院研究科から十四編の投稿がありました。

文学部 五編 教育学部 一編 法学部 三編 理学部 一編
医学部 二編 薬学部 一編 大学院社会文化科学研究科 一編

過去四回はいずれも二十編を下ることはなかったのですが、いささか物足りない応募数でした。一時的な現象であってほしいと思います。応募数は減少しました。しかし、作品の質は少しも落ちていないという選考委員の先生方のお言葉に、私は意を強くしました。

選考に当たられたのは西川盛雄（熊本大学名誉教授）、岩岡中正（法学部教授）、高峰武（熊本日日新聞社取締役論説委員長）のお三方です。高峰委員には今年度から委員就任をお願いいたしました。学外の委員が加わっていただくことによって、教員とは少し違った眼で作品を評価してくださいではないか、そして新しい才能を発掘してくださいではないかという期待がありました。また、そのことが今後学生諸君の応募への意欲を高め、応募作品が増加するのではないかと、今期待も持っています。

今回惜しくも選に漏れた方、また今年度は応募されなかった方、来年度の挑戦をお待ちしています。

ところで、小説は読むものではあっても書くものではない、書けるのは特別な人と思いませんか。そんなことはありません。小説は文学のなかで最も自由なジャンルであると言われます。小説には制約が少ないのです。というより、典型的な作品、著名な作品、評価の高い作品、言い換えれば、その時代に最も小説らしいとされる小説を乗り越え、小説の概念を覆し、新しい作品を生み出すのが小説の歴史であったと言っても言い過ぎではありません。

あなたの想像力を地図にして言葉だけを携えて冒険を試みませんか。あなたはそこで、ふだんの思考や行動



によっては出会うことのない何ものかときっと出会うはずです。それは、新しい自分あるいはもう一人の自分です。私が作品を創作するというより、表現行為を通じて「私」が創られていくのです。

たとえば、芥川龍之介は大学三年生の時「羅生門」を発表しますが、誰からも注目されませんでした。しかし、欠点もあるけれども良い作品だと思ってしまう密かな自負を、ノートに英文で書き付けています。そのなかに「活字になったこの作品を読み返すたびに、自分が鋭敏だと感じもし、また、当代の作家たちの作品何するものぞと思う自分の高慢さを笑わずにはいられない」という屈折した自己批評が見えます。芥川は三人の自分を発見したことになります。



上段：西川 岩岡 高峰
下段：具志堅 平井 森 黒江 吉川

かんざくら

猫ノ目 アキラ

「めずらしい。桜が咲く前に、外から人がやってくるなんて」

村長だという彼は、歓迎しているのかいないのか、たいそう判別しにくい顔でそう言った。

自分——夏野武史（なつのお たけし）——は、S県の警察官である。今までは交番勤務だったが、今年からF警察署の生活安全課へ配属され、階級は巡査長に上がった。

生活安全課（略して生安）というのは、地域生活を安心して送れるように、犯罪を未然に防止するための活動を行う部署だ。事件の捜査も行うが、パトロールや相談受付といった業務も多い。

F市は北側に山々が連なり、その麓の盆地に街が広がっている。F署勤務もそろそろ一年が経とうという二月の初め、空き巣被害の現場に向かうため、右手に雑木林を見ながら車を走らせていた時のことだった。

「最近、空き巣多いですな」

「しかも居空（いあき）が多いなんてな。不審人物への声かけ、怠るなよ」

助手席に座った巡査部長に喝を入れられる。

対向車もほぼ見かけない山道で、ちらりと山の方へ視線を向けると、森の中に道が続いているのが見えた。

「あれっ……」

次々と後方へ流れていく景色を、懸命に目で追う。林木の間に、遠く民家のようなものが見えた。しかし、木々に覆われてすぐに見失ってしまう。

「どうした？」

斜め後ろを気にする自分に、巡査部長が咎めるような声を上げる。

「すみません。……この奥って、人が住んでるんですかね」

「いや、誰も住んでいないだろう。見たこともないし、聞いたこともない」

でも、確かに何らかの建造物があった。民家を見落としているなら周知が必要だろうし、空き家でも犯罪組織の隠れ家等に使用されていないか確かめる必要があるのではないだろうか。

そんなことを考えたが、現場到着まであと少しとなり、この件に関して一旦は棚上げすることにした。

次の日、他の同僚にも訊いてみたが、誰もが知らないという。それはそれで問題なのではないかとある同僚に言ったら、課長に訊くのが一番なんじゃないのかとからかい気味に返された。

我が生安の課長は、署内でも有名な古参者である。何年か本庁にいたこともあるそうだが、警部になってからほとんどの年数を、このF署生安課長として勤めているらしい。もっと上を目指

せる器だと、本庁のお偉方からお呼びがかかっているそうだが、よっぽどのことがない限り、F署を動くことはない。

風変わりな警部だが、とにかく、気魄で只者ではないことが分かる。大声で怒鳴り散らすというよりは、必要なことしか口にしないタイプだ。部下への指示は的確で、この人についていけば大丈夫だと、皆の信頼は篤い。

そして、時々豪気に笑う。愉快なとき、部下の頑張りを褒めるときは、力強く笑う。気難しいばかりではないところも、部下に慕われる理由だろう。

そんな課長に、思い込みのくだらない質問をぶつけられるならやってみろ、と同僚は揶揄しているのである。

しかし、見たものは見たのだ。譲る気にはなれない。半ば意地で、課長にもその話をしてみることにした。

手が空いている時を見計らって、あるがままを話す。聞き終ええると、課長は是とも非とも答えず、席を立った。

「夏野、タバコ付き合え」

そしてさっさと部屋を出て行く。自分は喫煙者ではないが、上司の言うことは絶対だ。慌てて付き従う。おそらく、話す場所を変えたいのだろうということは分かったが、何故その必要があるのかは分からない。

人のいない喫煙所へ入ると、課長はすぐさま口火を切った。

「お前が見た道ってのは、獣道みたいなやつだろう」

「はい、そんな感じでした。道幅はそれなりにあったように思うのですが」

「その奥に、民家を見たのか」

「民家かどうかは定かではありません。でも、何か建物がありました」

課長は紫煙を吐き出す。

「実はな、その辺りに関しては扱いが特別なんだ。勝手に入るなよ」

ということは、何らかの管理がなされているということだろうか。課長の口ぶりから、あの辺りがただの山林ではないことが窺い知れる。そしてそれは、捜査のためでも立ち入ることができない場所なのだろうか？

「不満そうだな」

考えていたことが顔に表れていたようだ。慌てて眉間の力を抜く。「申し訳ありません」

「お前は、そこに行く必要があると考えているのか？」

詰問口調ではない。純粹に意見を求められているようなので、率直に答えた。

「はい。地域の安全のためにも、把握は必要だと思います」

課長は、煙草一本分思案した後、言った。

「分かった。実は二十年前、俺もそこへ行ったことがある。『湯浴』という地区だ。今はどうなっているのかさっぱり分からん。様子見に行っ来て、お前を担当にする。指示は俺に仰げ」

現状把握が済むまで、他の奴らには喋るなよ、と念を押される。その『湯浴』という地域は、

保護区の指定を受けているため、大人数で立ち入るのははばかられるということだった。

そのような経緯で、二月も半ば、誰も足を踏み入れない場所へ、巡回に行くことになったのである。

目的の林道まで車を走らせる。到着して、一旦車を停めた。不思議なことに、どの角度から見渡してみても、先日見かけた民家らしきものの影は見えない。やはり見間違いだっただろうか。目を凝らしてみると、森に吸い込まれるように続く未舗装の道は、先が見えなかった。はたしてどこまで車で行けるのだろうか。しかし轍が続いているから、車で行き来できないことはないだろう。

再びエンジンをかけ、ゆっくりと道を辿っていく。両側には木々が生い茂り、降り注ぐ太陽の光を遮っている。

そして二十分程走ったところで、開けた場所へ出たのである。

「これは…… このまま入っていいんだよね……？」

道の先に、人里があるようだ。しかし、石碑のようなものが路肩に設置されていて、道幅を狭めている。道の左手に木が生えているのだが、その正面に土が盛っており、石というか岩のようなものが据えられているのだ。完全に道を塞いでいるわけではないが、邪魔でしょうがない。まるでこれ以上、自分が先へ進むのを拒絶しているような気がした。

しかしそんなもので引き返すわけにもいかない。やや右側へ避けて、そのまま緩やかなカーブ

を曲がる。

「敵しい寒さが少しずつ緩み、雪がほとんど解けているとはいえ、まだ本格的な春には遠い時期である。両側に並ぶ木々は落葉樹らしく、丸裸で寒々しく枝を伸ばしていた。

程なくして、さらに開けた場所へ出た。単調な山道が続いていくのだとばかり考えていたが、そこは。

「完全に、人里じゃないか」

四方を山に囲まれ、摺り鉢状になった場所に、集落があった。右手の方には民家が多数立ち並び、遠くの斜面には学校らしきものが見える。左手の方は平地で、ちらほら民家もあるようだが、広々と水田が広がっている。

車を降りて、辺りを見回す。目を凝らすと、人が行き来し、山側に作られている畑では、農業をしている人々が見えた。

車をどこまで乗り入れて良いものか分からなかったのも、そのまま歩いていくことにする。まずは、住民に話しかけてみなければ。

少し行くと、植え込みを手入れしている中年の女性がいるのを見つけた。

「すみません。F署から来た者ですが」

警察手帳を開いて見せる。警察官は普通、濫りに自分の身分を明かしたりしないが、初対面の一般人女性に話しかけるには、不審人物ではないことをはっきり示しておいたほうが良いだろう。

女性はきょとんとしている。そして手帳を上げしげと見つめ、ああ！と声を上げた。

「もしかして、刑事さん？」

「いえ、所属は刑事課ではないので刑事ではありません。生活安全課の警官です」

苦笑しながら返答する。警察組織というのは、一般人にも知られているようで、実は誤解も多い。伝わるだろうか、と思っていると、とにかくおまわりさんのね、と言われて、まあそんなもんですと答えた。

「あら、じゃあ外から来たのね。もしかして、村の案内とか必要？」

面倒見の良いおばちゃんのように。それなら村長さんをお願いした方がいいわ、と話をつけてくれた。

村長は、ひどく淡々と話す、初老の男性だった。

そして開口一番、めずらしいと言われたのである。

「桜……？」

その時になって、村で裸同然の木々は、どうもすべて桜であるらしいことに気がついた。確かに、特徴的な横縞の木肌には、見覚えがあった。あれだけの桜が咲けば、見事なものだろう。ここは保護区だと課長が言っていたが、桜の保全のためなのだろうか。そしてこの里は、桜の季節には観光客がたくさんやって来るのかもしれない。

「村の案内でしたな。何もありませんが、行きましょうか」

村は、「湯浴村」というらしい。やはり、ここが課長の言っていた湯浴という地域のようだ。

名湯でもあるのかと思ったが、もともと「ゆめみ村」だったものが、「ゆまみ」、「ゆあみ」と間違っただけなのだ、村長が教えてくれた。

村民は約六百人。ほとんどが農業従事者で、そのうち三分の一くらいは建設の仕事も兼業しているらしい。その他は教師や郵便局員などの公務員。スーパーなどは見当たらない。個人経営の商店が三店舗あるのみで、どうしても村で買えないものは、市街地へ買いに行くのだそうだ。一昔前の農村が、そのまま残っているような感じだ。見渡しても、家と田んぼと山ばかりである。

「それにしても…… 駐在所もない。治安維持はどうやって……」

独り言のつもりだったが、村長は律儀に答えを返した。

「狭い村ですからねえ。みな家族のようで、大きな犯罪なんて滅多に起きません」

しばらくして、ああ、と思い出したように付け加える。

「時々、人がいなくなることはありませんが」

まあ……と、彼は何か言葉を続けたが、はっきりとは聞き取れない。

だいたい村の奥の方まで歩いてくると、間延びしたチャイムの音が村に響いた。

「小学校の授業が、終わったようですね」

そこが学校です、と指される。予想通りだった。その裏手に中学校もあるらしい。高校・大学は村の外にしかないそうで、その年頃の子どもたちは数年村を出て、卒業後に村へ戻ってくるという事だった。

この忘れられたような田舎村に、若者が戻ってくるのだろうか。過疎化が進んで、いわゆる限

界集落とやらののではないかと心配しているところへ、高台の学校から、小学生たちが下校してきた。二十人ほど、歓声を上げながら、仲良く歩いてくる。

「下級生たちですね。一年生から三年生です」

こちらに気づいて、子どもたちが駆け寄る。

「こんにちはー」「そんちょうさんだ、こんにちは」「おじちゃんも、こんにちは」「そこからきたひとー?」「おじちゃんそとのひと?」

こちら、こちらのお方はお仕事なんだよ、と村長が宥める。子どもたちは好奇の目を向けながらも、聞き分けよく返事をして、周りから引いていく。

何人か、いつまでもこちらに手を振ってくる子どもに、手を振り返す。

「みんなこの村が大好きな、良い子達です」

それを聞いて、先ほどの考えは杞憂なのかもしれないと思直す。

さて、と村長が後ろを振り返る。村の端まで歩いてきたので、さっきとはちょうど反対側から村を見渡すことになる。

「だいたい東側に民家が集まって、西側は農業用地ですね。あとご案内するとすれば、大桜ぐらいでしょ?」

「この村には、名物の桜があるのですね」

「ええ、樹齢四百年にもなる、この村の主です」

来た道の中ほどまで戻って、左の方へ折れる。その先は山奥へ続く、なだらかな坂になってい

た。道々に、硬い蕾を付けた桜の木が立っている。

しばらく歩くと、踊り場のような平地へ着いた。

「これです」

どっしりと、横へ枝を伸ばす、大樹がそこに構えていた。すべての花が開いたら、その迫力はきつと、自分のどんな予想も超えるだろう。そんなことを感じさせる、たしかな存在感があった。まだ、どの蕾も赤茶色に閉じているのが口惜しい。

「二月も半ばですから、もうそろそろ開花するでしょう」

「二月に、ですか？」

早咲きの桜なのです。おまわりさんも是非ご覧になるといい、と言いながら、老人は道を下り始めた。

そういえば、車を移動したほうがいいだろうか。尋ねると、車を停められるような空き地があるということだった。村の入口の方へ戻ることにする。

道すがら、これだけ桜の木が多ければ、春には観光客が大勢来ることでしょう、と話しかける。しかし、彼は首を横に振った。

「人が来ることはほとんどありません。蝶が、集まるのです」

何かを探すように、視線を彷徨わせる。

「そうして、桜が散る頃に、蝶々も散るのです。——あれを」

彼は田んぼの畦道の向こうにある、細い石碑を指した。村の入口にあった岩に似ている。同じ

ようなものだろうか。

「落蝶塚（らくようづか）、というのです」

「らくよう？ 落ち葉ですか？」

「いいえ、蝶と書いて『よう』と読むのです。桜が散る頃は、本当にたくさん蝶々が地に落ちる。あれはその、墓なのですよ」

我々の足は、自然とその墓標に向いていた。

「今の今まで目の前に舞っていた蝶が、ふわり、と地に落ちるのです。そのまま動くことはありません。この世で最も美しい地獄絵図です」

老人は、まるで見えない蝶を追いかけるように、視線を泳がせた。

「私たちは、彼らが単にこの村で命を終えるから弔うのではありません。春の毒が溜まって飛べなくなった蝶であるから、弔うのです」

ぼつぼつと語る老人の声に耳を傾けていると、いつの間にか、塚の前に辿り着いていた。

老人は浅く一礼する。細長く、歪な形をした石の碑には、わずかに蝶の形が彫ってあるのが見て取れる。しかし、今では風化して、だいぶ磨り減ってしまっていた。

老人に合わせるように俯き、私は口を開いた。

「春の毒、とは」

彼は、視線を落としたまま答えた。

「先人たちが名づけたまま、ずっとそう呼ばれているのです。桜の木が風に乗せて流す、強烈で、

蠱惑的で、妖艶な——ええ、毒としか言いようのないものなのです」

彼は自分に言い訳をするように、溜め息をついた。

「風に乗った毒があちこちで蝶を呼び、この村に誘うのです。しかし——」

毒は身体に溜まるのです。そして蝶々は、その華奢な肢体を支えることができなくなり、地に墜ちる。

老人は、憑かれたように石碑から目を離さない。

毒なのです。桜が生き物を虜にするために作り出す、毒。いえ、桜にその意図はなく、私たちが勝手に惹かれていただけなのかもしれません。

彼の言葉は、だんだんと独白のようになってゆく。

「人間にも、毒なのでしょうが」

彼はやっと視線を上げ、即答した。

「毒ですよ」

そして、心の底から優しい笑みを浮かべた。

「人間は、蝶のように華奢ではありませんから。しかし、やはり毒を溜めているのです。その証拠に」

私たちは、桜の魅力に取り憑かれているではありませんか。

「この村では、特にそれが顕著でしょう。あなたは村の外からやってきたお方ですから、まだ毒も少ない。しかし私たちは——」

老人はどこか寂しそうに微笑み、それ以上、何も言わなかった。

日が暮れる前には、署へ戻った。ちょうど課長に会ったので、今日のことを報告する。

「あそこには、ちゃんとした村があったんですね」

課長の口ぶりからもそんなことは窺えなかったが、課長は知らなかったのだろうか。いや、そんな筈はない。などと考えを巡らせていたら、

「まだ、人が住んでたか」

やはり、分かっていたようだ。少なくとも、当時人が住んでいたことは知っていたのだ。何故、人里があると言ってくれなかったのだろうか。それも含めて、「様子見」なのだろうか。

「明日は、もっと住人から話を聞こうと思います」

課長は労うように頷き、一言、「氣いつけるよ」と言い置いて、仕事に戻った。

それから、毎日湯浴村に足を運んだ。村人に話を聞いていると、村の中での決まりごとや組織が思った以上にしっかりしており、それが防犯対策にもなっているようだった。

三日ほどすると、桜の蕾がばらばらと開き始めた。村長の言った通り、それからやたらと蝶を見かけるようになった。

「今年も、この時期がやってきましたねえ」

村長の幼馴染だという初老の女性が、目を細めて嬉しそうに言う。

日が長くなってきたからだろうか、子どもたちが外にいる時間も長くなってきたような気がする。

もちろん、村人と話すだけでなく、危険箇所の点検のために村を歩き回ったりしたが、既に改善されているところばかりだった。

派出所が必要ではないかと村長に尋ねる。しかし、今のところはうまくやっている、やんわり断られた。

一週間が経ち、桜の花びらは半分ほど開いたようだ。

官舎へ帰宅する。今日は、村長から一枚の写真を借りてきたのだ。

故人だが、村で写真を撮ることを趣味にしていた男性が撮ったものだという。奥様のご厚意で、村へ寄贈されることになったものだそうだ。

ひと目見させてもらった途端、風景に吸い込まれるような気がした。これが現実の光景だったのかと、目を疑いたくなるほど、美しい写真だった。あまりにも衝撃的だったので、無理を言っ
て、一日貸していただいたのだ。

一日の疲れを流した後、コンビニで買った夕食をアルコールで流し込み、一息ついた。借りた
写真を封筒から取り出してみる。

桜並木の道に立って撮った写真だ。月の綺麗な日だったのだろう、闇夜に道がぼんやりと浮か
び上がり、桜の花も冴え冴えと映えている。月光が空全体を包み込み、闇は漆黒ではなく透き通っ

た深い藍色をしている。

そして月明かりに皓々と照らされた道には、散った蝶々が黒々と横たわっていた。点々と、無造作に、静謐に、そしてなにより冷たく、無言で月に照らされていた。

寝る前に、そんなことをしていたからだろうか。

暖かい陽光を浴びながら、桜を上から眺めていた。空はペンキを流したようにのっぺりと青い。体全体に柔らかい風を感じる。私は桜の花に近づこうと躍起になる。

なんだか体の勝手がおかしい。うまい具合にいかないのだ。背中がうまくない。羽根をもっとリズムよく動かさねば——羽根？ そうだ、自分には羽根がある。桜に近づこう。

はたはたと羽ばたき、ふわふわと風に乗る、時には避けて、ひと房の枝にとまる。体が花びらに埋もれてしまいうさだ。涼やかで甘い香りが自分を包み込む。

なんて幸せなんだろう。

香りに酔って、再びふらふらと飛び上がる。空中には、ごくごく小さな薄桃色の蛍火のようなものが飛び交っている。

——毒だ。

春の毒だ。それは、空中の埃と同じように、避けることはできないもので、こうしている間にも、次々と自分の体内に取り込まれてゆく。取り込んでしまう。少しずつ、自分の中に遅効性の

毒が溜まってゆく。

急にがくん、と肢体を支えられなくなった。さっきまで咲き誇っていた桜が、はらはらと散り始めた。初めは小雨のように、そして次第に、吹雪のようになってゆく。そして自分は落ちてゆく。墜ちてゆく。体が動かない。羽根も動かない。

私の体はもう、春の気配でいっぱいだ。

花吹雪が降ってくる、降ってくる。目眩がするほどに花びらが踊る。それなのに、桜の木からは一片の花弁さえ剥がれてはいないよう——

不意に、吹雪はやんだ。そして空には月が出ていた。青白く光る満月だ。自分にも月光が差し込んでいる。体はいつの間にか冷え切って、春であるはずなのに凍ってしまったようだ。闇が、藍い。動けない自分の目の前を、高く低く、一羽の瑠璃たてはが舞っている。ふわ、と風が吹き抜けていったのを感じると、瑠璃たてはの羽ばたきはふつりと途切れた。そのまま、月明かりが手を伸ばす紺碧の空から、薄緑色の筋がきらりと落ちてくる。ゆらり、ゆらりと墜ちてくる。そして、私から少し離れたところに、ぱさりと落ちた。

こうやって、みな毒にやられて逝く。

嘆息さえも凍りつく。鼓動はとうに止まっていた。

静かだ。

しん、と空に浮かんでいた月が、急速に光を強めていく。月が強烈に、否、月ではない。あれは太陽だ——

視界が真白く塗りつぶされる。光に吞まれて——
目が覚めた。

ぼんやりと天井を見上げる。夢を見たのは久しぶりだった。しばらくしてからろろと起き上がり、日当たりの悪い官舎の窓を開ける。駐車場になっている敷地のアスファルトが、今日はやけに冷たく見えた。

少しずつ暖かくなってきてはいるが、ここでは、春の気配が感じられない。
早く満開の桜が見たいものだ、呆けたように、閉ざされた摺り鉢状の村に思いを馳せた。

村全体に、春の予感が満ちてくるのが、肌で感じられるようになった。やはりあの写真を見たからだろうか、満開の日が待ち遠しく、湯浴村へ来るのが自分の楽しみになりつつある。

今日も巡回を終え、山の奥から引き返してくると、桜の向こう側に、木を見上げている人影が見えた。桜の様子を見に来た住人だろうか？　しかし、どこかで。あれは——

F署で、毎日毎日目目している、顔。そう、失踪者の目撃情報を求めるポスターに載っていた写真に、よく似ている気がする。確か一年ほど前に姿を消した、若い女性の。

声を掛けようとした瞬間、ピリリリ、と無機質な電子音が響く。

電話だ。いつも通り尻ポケットを探るが、ない。そういえば、さっきしきとうき靴に入れてしまった。もたもたと靴を漁る。時折くぐもりながらも、ピリリリ、と電子音が鳴り続ける。

二つ目のポケットでやっと探り当て、取り出した途端、着信音がやんだ。

慌てて着信履歴を確認すると、生安からだった。すぐに折り返す。三回のコールで、同僚に繋がる。

「夏野です。先ほどの電話、誰からだったんでしょうか？」

ちょっと待ってください、確認しますね、と電話の向こうの声が一旦遠のく。やや間を置いて、怪訝そうな声が返ってきた。

「誰もかけていないようですよ」

「は？ だって、今」

確かに、着信履歴の一番上からかけなおしたはずだ。慌てたせいで、発信履歴のほうからかけ直してしまったのだろうか？

とにかくこちらから用事はなかったもので、電話を切る。通話終了ボタンを押した後で、もう一度着信履歴を確認してみるが、やはりついさっき課から着信がきている。

訝しく思いながら視線を戻すと、もうそこに人影はない。慌てて木の裏側へまわってみるが、どの方向へ目を凝らしてみても、人の気配すら掻き消えてしまっていた。

仕方がないので、だいぶ数の多くなってきた蝶々を避けながら、人里の方へ戻ることにする。よくこれだけの蝶がいるものだ。どちらを向いても、羽ばたきが視界にちらつく。

村のあちこちで桜が花開き始めている。ぐるりと見回すと、木々が山際をうっすらと白く染めている。まだ外の世界で開花の気配はないが、この里の桜はすべて早咲きの種類であるようだ。

そうこうしているうちに、人の集まる辺りまで来ていた。やや広い空き地では、今日も子ども

たちが遊んでいる。ヒーローごっこでもしているのか、男の子が白い棒のようなものを振り回していた。

近づくごとに、形がはっきりしてくる。少し黄色みがかっていて、両端にかけて太くなり、丸みを帯びて——まるで、大腿骨のような。

「それ……!! どこから持ってきたの!？」

緊迫した声に、その子はびっくりと体を震わせた。そして、ばつが悪そうに骨を背後に隠す。

「あ、いや……怒ってるんじゃないんだ。びっくりしただけなんだよ。それ、どこで見つけてきたのかな」

慌てて笑顔を取り繕う。遺骨で遊んでいたということが極まり悪いのか、彼らはしばらく視線を交わして押し黙っていたが、やがて観念したように口を開いた。

「こっち」

あーあ、だからやめようっていったじゃん、などと言いながら、他の子どもたちもついてくる。

「ここ」

案内されたのは、大桜の前だった。地面には、確かに土を掘り返したばかりの様な跡がある。

「見つけたのはそれだけ？ 他の骨はなかった？」

辺りを見渡しながらそう尋ねると、子どもたちはきょとんとした。そして、

「他に？ いっぱいあるよ。だってこの辺りには、いっぱい埋まってるもん」

「え？」

別の子どもからも声が上がると。

「死んだら、みんな桜の木の下に埋められるから」

「あのね、死ぬまでに、どこに埋められたいか考えとくの」

さっきまでなんとなく成り行きを見物していただけの子どもたちが、急に生き生きと目を輝かせ始めた。俺こころ、じゃあ僕はこっち、私はここ、と、めいめいに散らばってゆく。

あちらこちらから顔を覗かせる子どもたちを、呆然と見回す。

つまりここは、墓地なのか？

確かに、この村では墓石を見かけない。土葬は法律で禁じられているが、時代錯誤なこの村では、まだ昔の慣習がまかり通っているのかもしれない。

しかし、墓石がないということに何か引っかかる。自分は、本当にこの村でそれを見かけていないだろうか？

ああ、そうだ。

近くで土を均している子どもにも声をかける。

「ねえ、蝶は桜の木の下には埋めないの？」

人間の墓石は見えていない。しかし、村のあちこちで石碑は見かけた。落蝶塚だ。何故、人間の墓はないのだろうか。

「ちょうちょは落蝶塚のところに埋めるよ」

「……なんでだろう」

子どもにその理由が分かるとは思っていないので、独り言である。しかし、意外にも返事があった。

「ちようちょはね、桜と同じだから」

だから、どこに埋めてもいいんじゃない？と事も無げに言う。

意味を測りかねて、言葉を失う。そんな私の様子を意に介すこともなく、その子は均した地面に円を描き、自分の名前を記している。

それに気づいた他の子どもが、それいいね、と真似を始めた。

ぱらぱらとしゃがみ込む子ども達と木立の中で、ぼんやりと立ち尽くす。ふと、この子どもたちは人間に近いのだろうか、それとも桜に近いのだろうか、という考えが過ぎった。

湯浴村の調査に来て、もうそろそろ二週間になる。最近は、専ら湯浴で過ごす時間が長く、課長ともあまり連絡を取っていない。桜の枝を彩る花卉は日に日に密度を増し、最盛の時期はまだかまだかと、期待に満ちているのが目に見えるようである。

そんな折、課長の方から連絡がきた。

「最近の様子はどうか」

「至って平和です。ただ、捜索願の出ている人物と似た人を見かけたので、聞き込みしてみようと思います」

「そうか。ただ、もとの場所に戻ることで、本人にとって幸せだとは限らないがな」

最後の方は、まるで自分ではない誰かに言い含めるような、そんな違和感があった。

しかし課長はその件に関してそれ以上は言及せず、話題を変えた。

「そういえば、まだ桜は咲いていないか？」

自分は、桜の話を書長にしたことがあっただろうか？ それとも、一般的に桜の時期だからそんな質問をしたのだろうか。考えるより先に、言葉が滑り出る。

「ああ、八分咲きくらいですかね。もうすぐ満開でしょう」

きれいなもんですよ、という言葉を遮って、緊迫した声が響いた。

「なんだと!? 桜の開花予想によると、満開はまだ先のはずじゃ……」

課長は絶句する。どういうことだろう。しばらくして、課長は盛大に舌打ちした。

「見落とした。桜の開花予想に使われるのはソメイヨシノだと聞いたことがある。山桜の類は、それより早いかもしれない」

一体、桜の満開がなんだと言うのだ。

「変わったことはないか」

あるといえば、あるような。しかし、すべて気のせい、あるいは、科学的な理由をつけようと思えばつけられるようなことばかりなのかもしれない。

返答に窮していると、思考を断つように課長の声が耳に刺さった。

「夏野、しっかりしろよ」

「は、はいっ。……すみません」

気を確かに持て、戻れるうちに戻ってこい、という言葉が最後に、電話はそこで切れた。携帯電話を尻ポケットにしまいながら、課長の言葉を反芻する。

『戻れるうちに』とはどういうことだろう。そして『本人にとって幸せとは限らない』という言葉は、誰に向けたものだったのか。

そんなことを考えていたら、いつの間にか大桜の前に立っていた。つい足を運んでしまい、ここに来るのが日課になっている。村人たちが誇らしく思うのも無理はない、一面の桜景色は、時間を忘れるほど人を魅了する。

満足して、ふと足元に視線を落とすと、子どもたちが名前を書いていた跡がまだ残っていた。自分の足の下にも、誰かの名前が記してある。気にしていたらきりがなが、やはり踏むのは忍びない。そっと足をずらす。

『夏野 武史』

そこに記してあったのは、紛れもなく自分の名前だった。

「え……？」

いいや、同姓同名の村人なのかもしれない。もちろん自分で書いた覚えはないし、自分の名前をフルネームで、しかも漢字まで知っているとしたら、警察手帳を見せた村長か、最初に出会った中年の女性しかいない。どちらかが、わざわざ自分の名前を書きに来たのか？ 警察手帳を見せたのも一瞬だ。まさかそれだけで、名前を覚えられるとは思えない。

唐突に、いつかの子どものもたちの声が、記憶の中から引きずり出される。

——死んだら、みんな桜の木の下に埋められるから。

——あのね、死ぬまでに、どこに埋められたいか考えとくの。

混乱しながら、無意識のうちに靴で氏名を消していた。はっと気づいて、もし同姓同名の村人が書いたものだったのなら申し訳ないことをした、と思い直す。罪悪感のせいなのか何なのか、急速に鼓動が早まっていく。心音が、後頭部の辺りにじんじんと響き始める。

上の方から視線を感じて、反射的にそちらを向く。空を覆い尽くすような薄紅色の花弁が、こちらを見下ろしていた。

心臓が不規則に跳ねる。これ以上ここにいてはいけないと、第六感がそう告げている。考える暇もなく、開けた場所へと走り出す。

自分が居るべき場所ではないのか、焦っているのか、それすらもよく分からない。ただ、この桜の里は、自分が居るべき場所ではないと、はっきり感じた。

木々の合間を縫って、転がるように森から出る。ひどく呼吸がしづらい。まるで煙の中にいるようだ。咳き込みながら、見えない煙から逃れようと歩き続ける。

水田地帯まで来ると、さっきより空気が澄んでいるような気がした。呼吸が楽になる。

一息ついたが、どうしても山の方を見る気にはなれなかった。そのまま、村の入口へ向かう。畦道の向こうから、学校帰りの中学生達が歩いてくるのが見えた。いつもより下校時間が早いようだ。短縮授業だったのかもしれない。

学生服を着た男子生徒が、挨拶をして通り過ぎていく。この村では、古き良き時代の人懐っこ

さが依然として生きている。いつまでもそのままではしないと、微笑ましく思ったものだ。そして今日は、いつにも増して明るい笑顔を向けてくれている。しかし何故かそれは、居心地の悪さに拍車をかけるばかりだ。

一点の曇りもないような笑顔と対照的に、ぎこちない笑顔を返す。男子の集団が過ぎた後、少し離れたところに、仲良し二人組の女子が歩いていった。村でも特に仲良しらしく、二人でいるところをよく見かける。

今日も仲良くおしゃべりをしているようだったが、ふと片方が立ち止まった。もう片方に、道端の何かを指し示している。

立ち止まった方が、それを拾い上げた。黒い葉っぱのような――

「これさ、今年初めてのやつじゃない？」

「そうかも！ まだ落ちてくるの全然見かけないもんね」

だんだんと、会話が聞こえる程の距離になってきた。何の話だろう。

「きっと、落ちたばかりだね。もったいないから、もらっていいかな」

「ひとつくらい良いでしょ。見つけた者勝ちでさ」

拾った女の子は嬉しそうにはにかみ、手のひらに載せていたそれに、口を付けた。

その刹那、それが何かを理解した。

「ちよっと……!!」

蝶だ。その子は子どもらしい真っ赤な唇で、黒と紫のグラデーションで彩られた羽根を啜え、

ぴっと引っ張った。羽根が一枚取れ、それをそのまま、彼女は咀嚼する。紫色の鱗粉が、真っ赤な唇を斑に染めた。

「……!？」

常識では考えられないような光景に、啞然とする。思わず足を止めた自分に、彼女らが気がついていた。

「あ、おまわりさん」

羽根を飲み込んだ女の子が、口元を拭って笑顔を向けてくる。

「こんにちは！」

顔が引き攣るのが自分でもよく分かったが、取り繕うこともできない。掠れた声で「こんにちは」と返すのが精一杯で、目も合わせずにその場を離れる。

随分愛想のない態度だと思われてしまっただろう。ただどうか許してほしい、そもそも、ここへ立ち入ったのが間違いだったと、今でははっきり分かったのだから。

思えば、この湯浴村では不可思議なことがいろいろとあった。ここはただの田舎の村ではない。外の世界とは、何かが決定的に違っている。

ひたすら村の入口を目指す。もうすぐ車を止めている場所へ辿り着く、というところで、村長を見つけた。正直、もう誰とも話したくはなかったが、向こうもこちらに気づいたので、仕方なく立ち止まる。

「こんにちは」

「今日もご苦労様です。何か困っていることはありませんか」

「いえ、今日はもう署に戻るところですので、大丈夫です」

「おや。お忙しいのですね」

では、何かありましたらまた、と言って彼は立ち去ろうとした。流石に、いろいろと世話になったので、お礼のひとつも言わずに帰るわけにはいかない。腹を括って、彼を呼び止める。

「村長さん、自分はもう、ここには来ないと思います。お世話になりました。何かあったら、F署にご連絡を」

深く一礼する。

「なんと。そうですか。桜も、これからが見ごろなのですが」

言いかけて、彼はふと口を噤んだ。そして何もかも諒解した、というように頷いて、「そうですね、今だからこそ、お帰りになった方が良いかもしれません」と言った。

もう一度深く頭を下げて、顔を上げると、そこに村長の姿はもうなかった。

不意に、初めて村を案内してもらった時のことを思い出す。そして、あの時間き取れずに受け流した内容を、唐突に理解した。

『時々、人がいなくなることはありませんが』

『まあ、人間の仕業ではないので、どうしようもありません』

そうだ、この村では、すべて桜のせいなのだ。自分を守るべきなのは人間の作った秩序であって、この村に、桜が支配する村に、干渉するべきではなかった。

脇目もふらずに、車へ乗り込む。唇を噛み締め、アクセルを踏んだ。

通いつめた道を、逃げるように逆走する。外界へ通じる林道が見えてきた。

いつもより道が広く見えるのは、自分が外の世界を望んでいるからだろうか。いや、違う。いつものなら――

道に迫り出して作られていた落蝶塚が、今は道路脇の木立と並ぶように、ひっそりと立っている。最初からその位置にあったかのように、慎ましく。ここを通れと言わんばかりに。

何かを繋ぎ留めていた糸がぶつり、と切れた気がした。減速せずに通り過ぎる。薄暗い森へ入る直前、ふと視線を上げる。

バックミラー越しに、村全体が、桜色に烟っているのが見えた。

翌日、課長へ報告に行った。報告というよりも、これ以上自分はこの村へ行くことはできないと、それを伝えなければならなかった。

しかし課長は、自分の顔を見るなり、口を開いた。

「あの村で、お前は何を見てきた？」

桜の村を訪れた二週間が、走馬灯のように脳内を駆け巡る。どれも言葉にはならず、たった一つだけ、振り絞るように、言った。

「桜を、見ました」

馬鹿を言うな、と怒鳴られることを覚悟した。村の現状を報告すべきなのであって、まるで

花見でもしてきたような報告をしてどうする。しかし焦れば焦るほど、内容は文章の体を成さない。

背中には嫌な汗が吹き出していたが、意外にも、課長は「そうか」と静かに答えただけだった。もはや怒りも度を超え、言うべき言葉が見つからずに沈黙しているのだろうか。どんな処分を下してやろうかと考えている最中なのかもしれない。

蛇に睨まれた蛙のように、情けなくつつ立っているところへ、課長が溜め息をついた。

「昔、そこへ行ったことがあると、言っただろう」

予想とは全く関係のない発言に、混乱する。課長が、昔？ ああ、湯浴村に行く許可をもらった時、確かそう言っていた。

「二十年ぐらい前、この辺りには未解決の失踪事件がいくつもあった。どれも理由が分からず、遺体も上がってこない。そして湯浴だけ捜査していないことに気がついた俺は、当時の課長の静止を振り切って、調査しに行った」

俺も昔は聞かん奴だった。課長は低い声で、当時のことについて語りだした。

その時の課長も、村の事情について知っていた。あの村は対象外だ、立ち入るなど再三言われた。神憑りの桜があって、戻って来られなくなるから、と。だが耳を貸さず、捜査を強行して、湯浴で行方不明者を何人も見つけた。ひとりひとりに会って、話をした。捜索願が出て、家族が心配しているから一緒に帰ろう、と説得した。

でも、皆自分の意思でここに居る、帰る気はないと穏やかに拒絶するんだ。重ねて、家族には居場所を知らせないでほしいと言う。桜に魅せられて、囚われていることは自覚している、でも、だから、家族たちまで今の生活を捨てる必要はない、と。

それを聞いて俺は、麻薬の類なんじゃないかと踏んだんだ。

閉鎖的な村で、気づかないうちに何らかの植物によって依存症を起こしているのかもしれない。桜の妖力だとか、そういう理由付けよりよっぽど信憑性のある可能性だと思った。時代遅れで非科学的な言い訳なんか付き崩してやりたいと、俺は息巻いていた。

友人に植物学者がいたから、そいつを連れて行った。運悪く、桜が咲く時期だった。

結局、自分たちが調査した限りでは、中毒性のある植物や幻覚作用のある植物は見つけられなかった。そして調査を終える頃、あの、樹齢四百年の大桜が満開になった。

その頃になると、村人が訳もなく幸せそうなんだ。理由を尋ねると、皆、桜が咲いたから、と言う。ちょうどその時、村の青年が自宅の屋根の補修中に転落死する事故があったんだが、嫁は笑顔で「桜の時期に亡くなったのですから、本望でしょう」なんて言いやがるし、村人の中には羨む者も少なくなかった。

桜が生活のすべて。一様に幸せそうな村人を見て、俺はやっと、これは押すことも引くこともできない、幽体の呪縛なのだ、認めざるを得なくなった。

同時に、これ以上ここにはいけないと悟った。俺は、友人を連れて逃げ帰った。それ以来、あの村に踏み込んだことも、誰かを踏み込ませたこともない。

「そのご友人は…… 大丈夫だったんですか」

「いや。村を訪れて以降、酒に溺れた。挙句、発狂して死んじまったよ」

「なっ……」

「だが、その理由は本当に桜なのか？ この現代に、桜が人を惑わせる？ そんなことがあるものか。枯れ尾花、と云うだろう。気の迷いだ」

課長は、まるで自分の不甲斐なさを詰るように、声を荒げた。しかし、それはどこか苦しそうで、本心ではないような気がした。

すまん、と課長は一度頭を振り、気を取り直したように真っ直ぐ自分を見据える。

「疑心暗鬼の産物だと、そう自分に言い聞かせてきた。だからお前が湯浴へ行くと言い出した時、余計なことは言わず、真っ新たな状態であの村と対峙させてみようと思った。でもお前は、あの村で、『桜を見た』と言った」

それはきくと、課長が抱えてきた二十年間の葛藤に、決着をつける答えだったのだろう。

「俺は神様だとか、幽霊だとかは信じてねえ。ただ、長い間生きてきたモンには凄味が出てくる。それに庄倒されちまうっていうことは、あるんじゃないかねえかと、今はそう思う」

それならあいつも、あのまま湯浴に残ったほうが良かったのかもしれない、と呟く課長を見て、電話越しに聞いた言葉は、課長自身に言いたかったことなのだろうと察した。

そして自分に言い含めるように、課長は続ける。

「でも最期は、正気に戻ったように見えた。少なくとも、暴れるだの喚くだのはしなくなった。口数が極端に減って、静かにどこか遠くを見ているような感じだったな」

そして奴は突然、病院の公衆電話から電話をかけてきた。

やけに真面目な声で、「お前に見てほしいものがあるんだ」って言うんだ。自分が唯一遺せるものだ。

しばらくののち、再び連絡を受けた。面会すると、驚く程穏やかな表情をしていた。

そして奴が俺に見せたのは、奴が描いた桜だった。

覚悟はしていた。奴が精神の平静を取り戻すきっかけになるとしたら、もうそれしかないというのは想像に難くなかったから。

嫌がらせか、復讐のつもりかもしれない、と思った。俺が奴をあつ村に連れて行かなければ、もっとまともな人生が送れたはずなんだ。俺に悪意がなかったにせよ、友人へ報いるためには、その絵を正面から見据えなければならぬと、腹を括った。

そうしてもう一度対峙したあの桜は、強烈だった。でも、なんというか、圧倒的に美しく、それだけだった。

職業柄スケッチはよくしていたようだが、芸術的な絵心はない奴だった。そいつが、あの体験だけで息を呑むような絵が描けたのは尋常じゃない。でも、布と筆じゃあ、あの生々しさは表現できなかった。

それが多分、俺を救ったんだ、と課長は小さく呟いた。

「奴の絵を見た瞬間、それが目に焼き付いちまった。それ以来、本物を思い浮かべようとしても、どうしても思い出せない。俺が思い出せるのは、ただただ優美に咲き誇る桜の絵だけなんだ」

じっと一点を見つめていた課長だったが、しばらくして、急に我に返って言った。

「ほどなくして、奴はあっけなく死んだ」

「絵は、課長がもらったんですか」

「いいや。正直そんな度胸はなかった。引きずられない自信なんかなかったからな。でも、未だに俺が正気を保っていられるのは、あいつのおかげだろう」

課長は腕を組み、いつになく真剣な表情でこちらを見据えた。

「お前は、あの村に骨を埋めたいと思うか」

静かな問いだった。彼岸と此岸のどちらを望むかと尋ねるような、簡素で、危うい、二択。しかし冥府の門番は、どちらの返答でも受け入れるという深い海の如き眼で、迷い子の答えに耳を澄ませている。この人に、自分に、恥じない答え。問われる前に、自分は既に選んでいたのだ。躊躇わずに、口を開く。

「いいえ。課長の助けもありましたが、自分は自分の意思で戻って来ました。此処が、自分の在るべき場所だと思っています」

言うじゃねえか、と課長が破顔する。物憂さを吹き飛ばすように豪快に笑う様は、いつもの名

物課長である。

要石のような厳然たる気魄の源は、桜の魔力に打ち勝ったところにあるのかもしれない。課長がF署に、生安に居座り続ける理由もそこにあるのだろうと、暗黙のうちに悟った。

「お前もすごいもの見て、バシッと帰ってきたんだ。この経験生かして、一睨みすれば事が運ぶくらいの、それぐらいの凄味は身につけるよ」

課長は呵呵と笑う。桜の妖気に触れてなお、正気を保つ猛者は、老樹ほどではないが充分人知を超えた覇気を纏っている。自分は、この人と同じ悪夢を見たのだと、そう思った。

桜の村は、再び封印されるだろう。それでいい、人間が足掻いても、そこに在るだけの桜に惹かれてしまうのだから。人間のように、必要以上に奪ったり、害したりすることがないのなら、こちらも領分を弁えることが最良の均衡なのだろう。

「よし、ご苦労だった。仕事に戻れ」

強く頷く課長の眼差しに、自分が少し成長したような気がした。いつか自分も、この人のようになれるだろうか。

はいっ、と腹の底から返事をして、踵を返す。

その瞬間、くらりと世界が歪む。同時に、「頼みますよ」という声にならない声が耳元を掠め、何かの予感とともに、まだ見ぬ未来の彼方へ消え去った。

(法学部法学科四年)

欲望の街

坪井 希

趣味と実益を兼ねた作業とはいえ、明け方から休みなしに続けていればさすがに疲れが溜ってくる。編みかけのレザーリングを机の上に放り出し、代わりに鍵を手を取った。

真鍮の棒を回した後、しつこいくらいノブを捻って施錠できたか確かめる。不穩に軋む螺旋階段を下りてアパートメントを出た。

着飾った婦人が目の前を過ぎる。刺激臭に、私は思わず顔を顰めた。

石畳の道には屋根付きのワゴンショップが点々と止まっている。町の中心にある本店から、こんな外れの住宅地までやってくるのだ。毎日毎日、ワゴンから溢れるほど商品を積んで。

どのショップにも常に人が群がり、団子のようになっている。初秋の風と共に、硬貨を握った子どもたちがその間を走り抜ける。彼らの内の幾人かはそのうち迷子になるだろう。つまづき、ぶつかり、ひっくりかえし、そして大人に叱られる。泣き声と怒号が商人の口上に被さるから、人々はますます顔を赤くし、思い思いに喚き出す。

活気のある町だ。しかし好きにはなれなかった。

「あら、指輪屋さんじゃないの」

ぎょっとして振り向くと、馴染みの客が立っていた。

「今日はお店、開かないのね」

「ええまあ。見たところ、スペースもありませんし」

「今日はお店が多いから。裏町からもいくつか来てるんだって。ほら、あのワゴン」

指された先の人垣からは確かに見覚えのないマルシェワゴンが覗いている。商人が朗々と宣伝文句を謳いあげると、女たちの喧しい歓声が聞こえた。

「珍しいですね。あんな高級店が、わざわざここまで」

「でしょう。でも、掘り出し物がたくさんあってね、皆大喜びよ。私もこんなに買った」
婦人は紙袋からさがさと衣服を取り出し、私に示してみせる。橙色のタグまで見せつけてくるものだから、私は苦笑して、小さく肩を竦めた。

「これからもやって来るんですかね。……私の場所はますます無くなります」

首に巻いたファーに化粧の濃い顔を埋め、女は笑った。

「あらあら、まあねえ。あなたの指輪、地味だからねえ」

歩きながら少し肩を窄めた。人が溢れる往来は動きにくくて仕様がなない。彼らの身に付けた装飾品や手荷物が邪魔なのだ。誰かと擦れ違う度に、大きな紙袋が私の身体を打つ。ご婦人方の巻

く毛皮の先はしょっちゅう頬を刺したし、気取った紳士のステッキは足を突いた。彼らは決して謝らない。絢爛な衣裳はそのまま財力の証明であり、正義の象徴でもあった。

「ほら見て、あの子」

路上で固まっていた女たちの一人が、そう言って隣を突つた。洋服自慢を中断し、皆がこちらに視線を向ける。私は努めて無表情のまま彼女たちの横を過ぎた。風に紛れて、嘲笑が追いかけてくる。

私の作る指輪や鞆、そして私自身も、受け入れられるどころか不当に貶められるばかりだ。いつまで経っても慣れることはない。

肩から下げた鞆に目をやる。丈夫で使いやすい、良い鞆だ。誰が見たってそう思う筈だ。どうしてこれが売れないのだろう。いや、……どうして私は、かつて得ていた評価に満足しなかったのだろう。故郷を飛び出しさえしなければこんな目に遭うことはなかったのに。

数か月前の過ちを、この頃は日々悔やんでいた。胃をきりきりと絞る貧困と憂鬱の中、わずかな楽しみを糧に過ごしている。——ようやく聞こえてきたこの歌声も、その一つだ。

庶民街の出口、鉄骨で組み上げられた巨大なアーチに、私はそっと寄りかかる。頭上から降り注ぐのは手風琴アコーディオンの伴奏と、伸びやかに響くハイ・バリトン。

スピーカーの傷みがひどく、時折途切れてしまうのが惜しまれる。音量にも乏しい。門の近くまで寄らなければ、十分に聞くことは出来なかった。

町の中心部から戻って来た人々は私を見ると一様に怪訝な顔をした。この町で流れる唯一の音

樂を、彼らは気にも留めない。きっと半数は、あの機械が辛うじて機能していることすら知らないだろう。身に付けられる「芸術品」以外ほとんどのことに無関心な彼らは、紙袋を携え獣じみた熱気の中に戻っていく。

私は彼らに背を向けて、中心街のさらに先、「裏町」へと向かった。

単純な造りの表町とは異なり裏町は路地の迷路だった。目的地へ辿り着こうと躍起になればなるほど迷う、不思議な場所だ。望みから一步距離を置かなければ正しい道を歩むことはできない。あのブティックへ着くのに、今日はどれくらいかかるだろうか。

清涼な空気を存分に取り込んで、モザイクタイルの上を軽快に歩いていく。どの通りにも小さな店舗がみっちり詰り込まれている。やはり上等な衣服や装飾品を扱うところが多い。表町と比べて人はかなり少なく、代わりに無数の猫がいて、そのせいか時折妙な気配を感じることがあった。

静寂を楽しみながら歩き続けて、私はようやくやく裏町でも一番暗い、ひんやりとした路地に出た。空がどんなに晴れていたって、ここだけは黒い布切れを透かしたように薄暗い。煤けた橙屋根のブティックの他は全てシャッターが下りている。それに、人間どころか猫の一匹も見ない。

臙脂色をした庇の下は不自然なほどべったりとした闇が広がっている。扉の向こうにあるものを私は知っていて、それを目当てにやって来ているにも関わらず、ここに立つといつも胸騒ぎが

した。

鈍い金色の取っ手を掴み、そっと引く。扉に吊られた鐘が、ちりんちりんか、からんからんか、やたらと大きな音を立てた。

私を知る限りこのブティックに人がいたことはなく、それは今日も同じだった。毎日商品と御香を入れ替え、マネキンを飾って、それから店主はどこへ行くのだろうか。毎回服を置いた棚のどこかには空気が見られるから、客足がないわけでもなからうに。

この店を訪れた当初は不気味で仕方がなかったが、近頃はむしろこの状況に安堵する。服を買うのが目的ではない。この店でたった一体のマネキンに、私は会いに来たのだった。

洋服棚の間をゆっくりと歩く。相変わらず、奇抜で派手な商品ばかりが置いてある。まったく好みではないし、値段を見てもとても手が出ない。そのくせ毎回手に取って眺めてしまう。吸い寄せられているようだった。

衣服を再び棚に戻すと私は店の最奥に進んだ。丸い光がぼつぼつと落ちたお立ち台、そこがマネキンの定位置だ。

彼は背の高い椅子に右足を乗せ、右腕を膝の上に置いていた。五本の指は青白い頬に這ったままぴくりとも動かない。小さな喉の膨らみ、肩はやや張っているものの丸みを帯びて、露出した肢体は細くしなやかだ。端正な横顔を女性のものと錯覚しそうになる。

暫く黙って眺めていたが、関節の角度は一切変わらなかった。

「……こんにちは」

横顔に声をかけると、伏せられていた長い睫毛が少し震えた。もう一度囁いてみる。

「こんにちは。今日の格好もお似合いです」

ぱっと現れた翡翠色の眼球が、じろりとこちらを見た。私はそれに微笑みかける。マネキンの正面に回りこんだ。

剥き出しになった右足に目を移す。少し屈んで、息がかからない程度に顔を寄せる。首を傾けて、膝上から足首にかけてを側面から眺める。

私では到達できない曲線美。傷やシミの一つすら確認できない、陽光の下ではきつと白すぎる肌。……この肌の下には、私やこの町の人間たちと同じ素材でできた骨があり、血液がある。生きた人間をマネキンとして雇う店主の意図は分かりかねるが、それでも私は、その試みの成果に魅せられた。

店に置かれた商品の中でも、彼を包む衣装には特別心を惹きつけられた。一度そちらを注視すれば最後、その肢体がぼやけてしまうほどに。纏った服の魅力を引き出すなにかがきつと彼の中にはあるのだと思う。新たな価値を生み出せるのは素敵だ。この町に来てから、そんな人間に出会うことはなかった。だから余計に好ましく感じる。

私は体勢を戻し、マネキンの肩口を覆うレースを摘んだ。ちらりと覗いた肩関節を手のひらで撫でてみたくなる。私の欲望を敏感に察知して、とうとう彼が口を開いた。

「触、るな」

拒絶の言葉はひどく掠れている。

「分かっています、お洋服だけ。……素敵なおドレスですね」

口をきいても人間として生きていくように思えないのは、まったく不思議なことだった。一体何が彼を人形たらしめているのだろうか。

マネキンは、「離れろ、触るな」と私を突き離す言葉を義務のように繰り返す。他には何も語らない。虹彩のはっきりした、作り物のような眼球が少し恐ろしい。

諦めて、彼から一步距離を置く。頭のとっぺんから爪先まで一度視線を落とした後は、ざっくり裂けた黒いドレスとピンヒールにしか注目できなくなる。彼の肢体はもうドレスの付属物に過ぎない。

私が溜息を吐くと、翡翠の目玉にちらり、嘲笑の影が過った。

瞬く間に日々は過ぎて、気付けばもう秋の終わりだ。暖炉にくべる薪が買えなくなるほど困窮した私は、暖を求めて外へ出た。

アパートメントから三十分ほど歩くと、町の中心部に着く。そこでは石造りの劇場を中心に、円形の芝生が広がっている。「中央広場」と呼ばれるそこはいつでもひどく閑散としていた。

その外側を囲むように建ち並ぶ商店にしか、人が集まらないのである。

宣伝用のフラッグがない店舗を選んで入ったが、中はやはり買い物客でごった返していた。皆が皆片手で商品を握り、もう片方の手で財布を漁るか、他人を押しつけるかしている。騒音と香水の入り混じった匂いが耐えがたく、とても暖をとるどころではない。

吐きそうになった私はすぐに店を飛び出した。深呼吸をしながら枯れた芝生の上を歩く。野外劇場まで来ると、ようやく気分が楽になった。

催し物もなにもない、寂しい舞台に腰掛ける。ぽつぽつと植えられた広葉樹に目がとまる。耳に刺さる声をあげて、一羽の鴉が飛び立った。小さく揺れた木はほとんど裸同然で、あちこち枝が折られている。……薪を買う金をも洋服につき込むというのが表町ではさほど珍しくないことを、私は最近になって知った。

根の近くに咲いていたはずの花は全て茎から千切られていた。そういえば、花卉を樹脂で閉じ込めたアクセサリーが流行っているらしい。表町に職人はいないから、手折っていったのは裏町へ買い付けに行く商人か、彼らから小銭を得ようとした町の人々だろう。

私は暗澹となった。他にすることはないのか。

皆が皆、美しいものを取り合っている。毎日毎日飽きもせず、そればかりして生きている。洋服、宝石、ビスクドールに玻璃硝子、町はずれに建つ時計屋だって、夕日が差す頃にはがらんとうになってしまふ。

衣服を剥ぎ取られたマネキン人形が立つ、空虚な店内。脳裏に浮かんだ光景はそのまま視界に

重なった。そうだ、彼らは鴉に似ている。欲しいものが詰まった袋に群がり突っつき、そこいら中を散らかして顧みもしない。単色の身体で、輝くものを寄せ集めた巣に蹲り、自分自身が輝いていると勘違いするのだ。

荒んだ気持ちでいると、ふいに足元で猫が鳴いた。ひょいと舞台上に飛び乗り、私の腕に擦り寄ってくる。つやつやした毛並みが優雅にうねった。

裏町から、ここまでやってきたのだろう。少し迷ったが、手を差し伸べるとじゃれてきたのでそのまま抱き上げた。気品を感じさせる顔に、そっと頬を寄せる。

「ここにいたらきっと筆られてしまうよ」

兎や狐の毛皮は当たり前前に売られているのだ。木々や草花と同じように、この毛皮が剥ぎ取られない保証なんてどこにもなかった。

このまま裏町に、あのブティックに行くことにする。

腕の中にすっぽりと収まった猫は、もそもそと動きつつも、まんざらでもなさそうな声で小さく鳴いた。胸が温もっていく。なんて自由で健やかな命だろうと私は思った。あの寒々しいアパートに連れ帰ってしまいたい。そうすれば日常はもっと鮮やかになり、健全な気持ちで生きられる気がした。

しかし私にそんな余裕などない。飼った猫を躊躇いなく外に放しておける、裏町の人々が羨ましかった。

例の路地に着くと、それまで大人しかった猫が突然不穏な鳴き声をあげた。全身の毛が逆立っている。

「……あ、えっ」

服を鋭く噛まれた。痛みより先に驚きがきた。慌てて手を離すと、猫は野性を感じさせる動きで石畳に着地した。そのまま元来た方角目がけて一目散に駆けていく。すぐに見えなくなってしまう。

一体どうしたというのだろう。嫌な匂いでもしたのだろうか。けれど、店の手前に植えられているのは猫不寄^{ヘンルダ}とは似ても似つかぬ植物だ。ひょろりとした茎に帽子^{フイド}のような紫色の花弁をつけた、不思議な花である。

疑問を振り払い、ブティックの前に立つ。やはり、中に人がいる気配はなかった。彼は昨日と変わらずあそこに立っているのだろう。

金の取っ手を引く。わずかな隙間から、糖蜜を薔薇水で溶いたような香りが鼻腔へと伸びてきた。

近頃はどうも香の匂いが強い。甘ったるいのも好きではないが、ここへ来る頻度は寧ろ増えている。彼と言葉を交わしたいという願望は、失せるどころか倍々に膨らんでいた。

マネキンは基本的に動かないし、喋らない。私は身体に触れる素振りを見せて彼の口を開かせ、質問を投げた。明確な答えが返ってくることはほとんどなかったが、彼の目や唇のわずかな動き

でそれを察した。

私は何日も、何十日もかけて、彼と一連のやり取りをした。

あなたの名前、住んでいる場所は。

——無視、もしくは否定の表情。

どうしてそんなに長く、同じ姿でいられるんですか。

——無視。

技術とか、そういうものがあるんでしょう。それとも精神力ですか。

——否定。

仕事が終わったら、私と話してくれますか。

——否定。

私のことはお嫌いですか。

——無視、もしくは「興味がない」。

何故ここで働いているんですか。

——『契約をした』

けいやく。……契約？

「答えになっていないんですよ。私が聞きたいのは、あなたがそうした理由であって……」

私は今日も同じ質問を繰り返した。マネキンはじっとこちらを眺めるばかりだ。彼はここ数日、拒絶の言葉すらも寄越してはくれない。

その瞳は以前にも増して作り物めいてきていた。照明を向けたときだけきらきらと輝くさまは、店に置かれたジュエルリングと何ら変わらない。虚ろというには澄みすぎていたが、感情や意思がまるで見つからなかった。

「ああ！」

沈黙の合間に、彼は目蓋を下ろしてしまった。声をかけたが効果はない。悔しくなって、私は踵で床を叩いた。

掻き立てられる執着。所有欲。意地でもその目を、その唇を開かせたい。躍起になって何かを求める人々の気持ちを少しだけ理解した気がする。このブティックに立っていると異様に心が乱れていく。

マネキンの指に目が止まり、新たな策を思いつく。

私は苛立ちながら踵を返し、入口の方に向かった。部屋の間には足の長い、白木のテーブルが置かれている。天板には硝子板が嵌め込まれており、その下には装飾品が一つ一つ、壁に連なるシーリングライトの光を受けて瞬いていた。

ピアス、ラリエット、ブレス、バングル、ピンキーリング。いずれも彼の肌に触れば更に輝くことだろう。緑瑪瑙のリングを掴み、再びお立ち台の前に戻る。

「……ねえ、これは付けませんか」

もう答えを待つことはしない。

瑪瑙の輪を持ったまま、彼の左手に目を移す。どの指も白く細く、触れたら最後曲がった手首ごと崩れてしまいそうだ。それでも、真珠を嵌めたような爪や皺の少ない関節をくぐらせてみたい。選ぶならやはり葉指だと思う。

ふと顔をあげると、薄く開かれた目と視線ががち合った。

底知れぬ憂いを湛えているように見えたのは、照明が作った陰影のせいに違いない。それでもその迫力に、私ははっと息をのむ。口腔に飛び込んできた薔薇の香りが身体の中で渦を巻いた。それは途端に熱に変わって血管をさあと流れていく。突き動かされるように、私はとうとう彼に触れた。

欲望の熱で膨らみきっていた心は、爆ぜるところか、ゆっくりと萎んでいった。

掴んだ左手は芯から冷え切っている。晩秋の空の下、野ざらしにされていたって、きつとこころはなるまいと思う。皮の下に通っている硬骨が、そっくり氷と取り換えられたようだった。

甲を指の腹でなぞると嫌になるつるつるしていた。曲がった関節を軽く叩いてみて、……私はぱっと手を離れた。彼から半歩、距離をとる。

自分の爪を改める。特別伸びているわけではない。指輪を握った左手、浮き上がった関節を同じように叩いてみる。どれだけ垂直に爪先を落としても、彼の骨を打ったときのような音は出なかった。

心臓が鼓動を速めていく。

天鷲絨びろんのカーテンが突然ばたばたと暴れ出した。臙脂色びろんが翻るたびにちらちらと覗く小窓は、しかし完全に閉め切られている。硝子の外は燃えるような橙。

熱風が押し寄せてくる。捲れ上がったワンピースを強く叩き、私は彼に右手を伸ばした。「逃げましょう」、そんな言葉が出た。初めて触れた頬は柔らかく、人の温もりもあった。

「にげる？」

彼は言葉を発してくれたが、澄んだ翠玉に感情の色はない。

私はひどく焦っていた。潤いを失くした喉が痛む。そのくせ溺れそうなのだ。御香から生まれたい甘い空気に体内が侵食されていく。うまく呼吸をすることが出来ない。

ぜい、と息を吐いて、やっとのことで言葉を繋げた。

「出て行きましょう、こんなところ。なにかがなくなっていく感じがする」

「なくなる」

彼は無表情で繰り返す。「そう！」と私は被せるように言った。「私のところに来て」と続けたのは、執着ではなく危機感からだだった。

「興味がない」と彼は答えた。再び瞼が閉じられたとき、その体から噎せ返るような薔薇の香りが立ち昇った。

悪い魔法にかかった気がした。くわんと歪む視界、固まる身体、踊り出す舌。……近くで女の声がある。

「生憎それは売り物じゃあないんだ」

ねっとりとしたその言葉が自分の口から転げ出たものだと、理解するのに、少しかかった。そして指先から温もりが消える。「パキン！」と音が弾けて、白い肌が砕けた。私の触れていたところが剥がれ、小雪のようにひらひらと、みっしりした空気の中を落ちていった。私は唯一動かせる眼球で、小雪が床に触れた途端にカサカサの石膏に変わるのを見た。

ぼやけた店の隅。カーテンは壁に張り付いて、小窓が完全に露出している。橙が膨らんで、こちらに這いだしてくる。硝子突き壁を滑り、床に伸びて行く様子に意思を感じた。気味の悪い、命に似たなにかを感じた。頬に小さな亀裂を作った彼はこんなものすら持っていないのだと、私はぼんやり考えた。脳を浸した薔薇の香が恐怖すらも押し包む。

光の手が私の腕にまで伸びてくる。為す術はない。橙が巻きつくと強い電気が走り抜けたように左腕が痙攣し、それに伴って拳もばつんと広がった。手の中から零れ落ちたりングが木床をカタカタと打った。

「……欲する、こと、が。ある……な、ら」

彼の乾いた息がかかって、私は再び自由になった。しかし身体は燃えるように熱い。

「……マダムに、聞け」

「——女主人」

暫く持ちあげていた右腕は軋み、肩からひとりでに落ちた。痺れた手首を返してみると爪の縁に白い粉がついていた。風はいつの間にか止み、湿り気を帯びた熱気も、薔薇の匂いも失せていた。香炉からはまだ煙が出ているが、鼻が麻痺してしまっているのだ。いずれにせよ、先ほどよ

りはずっと薄い。

それでも私は「今日はもうここに居てはいけない」と思った。

指輪の音が、止まらない。

身体に纏わりついた甘い匂いは数日経ってようやく消え、それに伴い、あのマネキンに対する好意と執着もなくなっていく。ブティックに通い詰める日々は終わり、この町に来たばかりの頃と同じ、指輪や鞆作りに専念する生活が始まった。しかし、憑きものが落ちたように感じるのは日中から夜にかけての間だけだった。

今日も私は両肩を抱き、震えながら身を起こす。十日前の記憶は不気味な夢となり、夜毎私を苛んでいた。

「……寒い」

冷え切った床に足を下ろすと痺れるような心地がした。薄い毛布に包まったまま暖炉の前に蹲る。薪をなめる炎に手をかざしながら、私はぼんやりと昨夜の騒動について考えた。

真夜中に突然、道の向かいにあるアパートメントが崩れたのだ。原因は地震。それは眠っていても気付かないくらいのもので、事実私も建物が倒壊した際の轟音で目が覚めた。窓から通りを見下ろすと、暗闇の中に白い光がいくつも浮かんでいた。街灯は随分前から役に立たなくなって

いるから、誰かが代わりの照明を持ちこんだに違いなかった。ともかくそのぼんやりとした灯りのおかげで瓦礫の上で何事か叫ぶ人の姿がいくつか見え、そこから少し離れたところに野次馬のものと思われる多くの影が蠢いていた。埃と砂をたっぷり含んだ煙が、魔物のようにゆっくりと空を昇っていった。夜風に煽られてこちらの方まで流れてきたから、私は窓を閉めて再び床にいたのだった。

薄いスープを一杯飲み終わると幾分身体が温まった。名残惜しい気持ちで毛布から抜け出し、着替えなどを済ませる。いつだって金欠だが、今日こそは買い物に行かなければ。もう食べ物がない。

階段を降り路地に出たが、存外平穏な様子で驚いた。いつもより静かなくらいだ。「まだ惨たらしい光景が広がっているかもしれない」とそんな覚悟をしていただけに、拍子抜けな気さえした。

理由はすぐに分かった。瓦礫が石畳にまではみ出して、ワゴンショップが通れないのだ。買物が満足に出来ないと不平を洩らす人々は、自らもワゴンの障害となっていることに気付かない。

「ちょっと、指輪屋さん」

どこかで聞いたような声に振り向いた。久しぶりに会った馴染みの客は、いつぞやより随分と老けていた。咄嗟に笑顔を取り繕ったが、婦人は私の動揺を見抜いた。

「ほらね、このところ食べ物が悪くないから」

早口で呟くと、威嚇にも似た大きな動作で外套を羽織りなおした。貧相になってしまった身体と、猛獣の毛皮で作られた重厚なコートとは、とても不釣り合いに思えた。

「昨日の地震、あなた気付いた？」

婦人は私に肩を寄せ、他の野次馬と同じようにひそひそと囁く。

「いいえ。大きな音で目が覚めただけで……揺れはまったく」

「私もよ。怖いわよねえ。つい最近壁も塗り替えて、見てくれはとっても立派だったのに、欠陥住宅だったんですって」

欠陥住宅。私が反復すると、婦人は「そう」とやや興奮気味に言った。「耐震性どころか元々の強度が致命的」、「建ててから実は何十年も経っていた」といった話をすらすらと教えてくれる。さっき降りたばかりの螺旋階段を思い出し、私は薄ら寒くなった。自分の暮らすアパートだって安心できたものではない。

「それでね、」

婦人の次の言葉に、私ははっと我に帰った。

「十三人、亡くなったんですって」

「……全員、ですか」

「全員よ。死体は昨日の内になんとかかんとか引っ張り出したって」

「それは、……えっと、御気の毒です」

アパートの残骸、瓦礫の山を眺めていた私は、一瞬口にすべき言葉を見失った。……死体が残っ

ていないなら、あそこに登っている彼らは何を探しているのだろう。

「……嘘でしょう」

食材が入った鞆を覗きこみ、私は思わずそう漏らした。わずかなパンと萎びた野菜、肉の塊がたった一つ。これでは三日としのげないだろう。

金が足りなかったわけではない。これくらいしか食べられそうなものがなかったのだ。埃っぽいい棚に点々と転がる食材はまったくの粗悪品ばかりだった。もっともなものはないのか尋ねると、胡乱な眼をした店主は「これでいいんだ」と吐き捨てた。

店のどこを見ても、中心街に建っているとは信じがたい有様だった。二度と来たくはなかったがそういうわけにもいかない。近所の食料品店は全て潰れていた。

家に直帰する気をなくし、それから向かった中央広場で、私は再び呟いた。嘘でしょう。

たった十日前に訪れたはずの野外劇場は、そこだけ何十年と月日が過ぎたように荒れ果ててしまっていた。

鉄錆の匂いが鼻に届く。階段の手前まで歩き、そこで足が止まった。どの段にも足をかけるのを躊躇うほどの罅がびっしりと入っていた。辺りには大小様々な石塊が転がっている。暫く考えて、それがかつて舞台を縁取っていたアーチの残骸だと分かった。

石を足場に、弾みをつけて舞台上がる。

額縁舞台の中央には廃棄物の山。鼻の奥をちりちりとさせる、独特の臭気を放っていた。わざわざ近くまで寄る気にはなれない。隅の方に照明機材が打ち捨てられているのを発見した。アーチにぶら下がっていたものだろう。緞帳は影も形もないがすぐにぴんときた。恐らくばらばらに解体されて、どこかの家の暖炉の中だ。

見上げた天井はほとんど崩れかけ、大きな穴が開いている。漂う雲の灰色が積み上げられた石と同化して、その空洞を塞いでいるように見えた。

目に映るなにもかもが健やかな想いを奪っていく。訪れたことを後悔した。……けれどこの場所こそがきっと、芸術が死に絶えたこの町にはふさわしいのだ。

やるせない気持ちで舞台を降りようとした時、私はかすかな音を聞いた。

「なにしてるの」

先ほどとは違う音、はっきりとした言葉。目の前に六歳かそこの少年が立っていた。このくらしい年頃の子は丸々としているものだと思っていたが、彼の輪郭は細すぎるくらいだ。

「ちょっとね、買い物をしていて、」

返答は棘のある言葉に遮られる。

「こんなところに何も売ってるわけないよ」

面食らった私を上から下まで眺め、少年は「変な格好」と呟いた。石を避けながらこちらに歩み寄り、舞台の下で両腕を持ちあげる。二つの藍が私を見つめ、薄く乾いた唇が動く。少年は当然といった調子で「そこに乗せて」と要求した。私はしばし悩んだが、結局従うことにして壇上

を降りた。背後から腕を回して抱え上げる。あまりの軽さにぎょっとした。

濃紺のダッフルコートが痩せこけた身体を隠しているのだ。間近で見たブロンドの髪も、ぱさぱさとして艶がない。

忘れてしまった説教の文句の代わりに「お母さんはどうしたの」と聞いた。少年は静かに芝生の向こうを指す。

「あちで、貂の襟巻を選んでる」

「傍にいらなくていいのかな」

「『邪魔だ』って言われたから」

ぴかぴかの革靴が舞台の上を歩き回る。ほとんど表情のなかった少年が、突然藍色の目をぱっと開いた。私の肩にかかった鞆を凝視する。

「これ？ あのね、お姉さんが作ったんだよ。いいでしょう」

「……ぜんぜん。茶色ばかりできれじゃない」

「色はね、そりゃあ地味だけど。でも使いやすいし良いものだよ」

「違うよ。印もないし、全然違う。こういうのが『いいもの』なんだ」

金ボタンの付いたコートの袖を、少年はぱたぱたと振った。

「いいものって、なにかな」

私がぼつんと言うと、彼はもっとむきになった。

「これが『いいもの』だもん。皆が言うから、そうなんだもん」

靴を鳴らし、性別の分からない声で繰り返す。しかしすぐに咳が出て、痲癢を起こすどころではなくなっていた。

ちょっとして咳が治まると、少年の表情はまた気力のない、淡白なものに戻った。ただ、青白かった頬はほんのりと色づいている。

「いいものなんだ」

念を押すように呟いた後、少しだけきまり悪そうに、少年はコートの裾をいじった。

「……でも、交換してあげてもいいよ」

「どれと、どれを？」

「これと、」

コートに付いたいくつかの金ボタンを示す。

「……それ」

彼の視線の先、私の鞆からは小さなパンの塊が覗いていた。「お腹が空いてるの」と私が尋ねる前に、少年は躊躇いなくボタンを筆取り取った。

「三つあげる。それよりずっときれいだよ。ねえ、交換」

「そんなことしていいの、怒られないの」

「大丈夫だよ。だって印はこっちにあるもん」

少年は外套を手早く脱いで襟元のタグを示した。グレーの裏地に縫い込まれた橙の布には見覚えがあった。ただ、どこで見たのかが思い出せない。

骨ばった手首を晒し、ボタンを突き出していた少年は、突然はたと腕を下ろす。「なにか聞かえる」、彼の言葉に、私も記憶を辿ることをやめて耳を澄ました。幸い風は凧ぎ、少年は黙っている。

彼の勘違いではない、間違はなく流れている。ぶつりぶつりと途切れながらも続いている。いづからか聞かなくなった手風琴アコーディオンの旋律が、どこか懐かしいあの声が。

「あそこだ」

私はスクラップの山に駆け寄った。鉄錆と、水が腐ったような匂いに耐える。手近なところから一つ一つ、破損した機材を除けていく。いくつかを抜きだただけで山全体のバランスが崩れ、音源が見つかった。

スピーカーをそっと持ち上げ耳を寄せる。罅割れた低音が鼓膜を打つ。錆が浮き、縁は欠け、更にぼろぼろになっていたが、あの門にぶら下がっていたものに違いない。一体いつ撤去されたのだろう。全く覚えがなかった。ここひと月はあのプティックのことで頭がいっぱいだった気がする。

「……うん？」

喜びに、ねっとりとした違和感が混じる。あの橙のタグと同じだ。私はどこかでこの声を聞いているのではないだろうか。門の傍ではなく、もっと別の場所で。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なに？」

傍に寄って来た少年が、かくんと首を傾げた。

「それ、どうして音が出ているの？」

「……え？」

スピーカーの側面には大穴が空いていた。部品はほとんど残っていない。本体を傾けると、小さなネジが乾いた音を立てて中を転がった。千切れたコードの先端が、ゆらゆらと揺れている。

しかし音楽は鳴りやまない。急に汗ばんだ肌を滑って、金属の箱ががしゃんと落ちた。

ふいに足元がぐらつき、体勢が崩れた。天井から、小さな石の欠片が降り落ちてくる。咄嗟に自分と少年の頭を庇って、その場に蹲った。廃劇場全体が震えている。

昨夜よりも規模の大きい地震が、町全体を揺らしていた。

少年と別れて一人戻った庶民街は、怒号と悲鳴に溢れていた。

潰れたアパート、巻き上がる土埃。なんとか無事だった建物からは人々が飛び出し路上を埋める。私は彼らの間を縫うように走った。

悪い予感の中する。周辺のいくつかの建家と共に私のアパートも崩れていた。自壊したのではなく、両隣の建物の巻き添えになった形だ。一階部分の骨組や壁が残っているだけでもこれまでに見たものよりは遥かにまじだった。……しかしいずれにせよ、もう住むことのできる状況ではない。

突然思い切り肩をぶつけられ、はっと我に返った。よろめきながら、後ろから飛び出してきた男の背中を覗む。

「邪魔だよ！」

中年女性が乱暴に私を押しつけた。彼女に続いて何人かが私の横をすり抜け、建物の残骸、瓦礫の上に駆け登っていく。折り重なる壁や天井板に足を取られながら、彼らは腰をかがめて何かを探す。それは今朝がた見たものとそっくり同じ光景だった。

一人の男が傷だらけのチェストを引っ張り出した。躊躇いなく引き出しを開ける。一枚の服を掲げ、彼は歓喜の声を上げた。

もう一人の男がすぐさまチェストに飛び付く。掻き集めた服の襟元を調べ、裾を裏返した。呪文のようなフレーズ、恐らくブランドの名前を声高に叫ぶ。

「——×××、×××だ、ここにある服全部そうだ！」

群衆の目の色が変わった。

互いを罵り、突き飛ばし、足を引っ張り合いながら、彼らは建物の残骸に殺到した。男たちがタンスを裏返す。若い女が空の衣装ケースを放り捨てる。老人たちは蹲り、瓦礫の隙間に手を突っ込んだ。

「その手を離せ！」

「最初に掴んだのは俺だろう！」

「あんたが着られるわけじゃないじゃない！」

「これは渡さないよ！」

「うるさい、黙れ、見つけたもん勝ちだ！」

篡奪と暴行があちこちで繰り返される。狂ったように喚き、蹴散らし、倒れた者には目もくれない。無数の瞳が夜道を駆ける獣のように炯々と輝いて、それらは一様に、橙色に染まっている。がらんとした石畳の道を、私は一人逃げ出した。

息を切らせて走る、走る。あっという間に鉄のアーチを過ぎ、中心街まで辿りついた。地を震わすようなどよめきと熱気が背後から迫ってくる。中央広場の縁をなぞるように、私は騒擾から逃げ続けた。

庶民街の住民は完全に暴徒と化し、円形に連なる店に押し寄せた。人とは思えぬ声をあげ、欲望のままに手を伸ばし、店内を蹂躪していく。罅割れたショーウィンドウにぱっと赤が散るのが見えた。

ただひたすらに恐ろしく、冷静でいることなどとても出来なかった。何も見ないよう顔を伏せ、私はそのまま裏町に飛び込んだ。

——もう、幾度角を曲がったか分からない。先に行けば行くほどに町は静けさを増した。風は止み、荒い息遣いと地を蹴る音だけが響いている。

身体は疲弊しきっていた。泥の中を泳いでいるようだ。しかし、肺に突き刺さる初冬の気は思考を鮮明にしてくれる。恐怖はしだいに薄れていった。先程の光景だけでなく、この町に來てからのこと一つ一つが脳裏を駆け抜けていく。

とうとう体力が尽き、足が止まる。両膝に手をつけて何度も大きく息を吐いた。胸とわき腹がひどく痛み、額から汗が滴り落ちた。頭だけが尚もめまぐるしく回転していた。何が起き、どう感じたか、取り留めのない数々の記憶は鼓動のリズムで繋がって、やがて一本の芯になる。それは熱い血を伝い、体中を巡り、私を支える。

呼吸を整え、顔を上げた。

眼前にはあのブティックがあった。

周囲の状況はいつもとはまるで違っている。他の店舗は全て消え失せ痕跡さえも残っていない。左右どちらの方を向いても、道の先は暗い霧に阻まれて見えない。振り返るとただの一本道で、はるか遠くに裏町の入り口であるアーチがあった。……つまり私は、T字路をただただ真っ直ぐ走って來たことになる。

不可解だった。けれどそんなことはもうどうでも良かった。このまま引き返すか、少しだけ考えて、私はもう一度ブティックに向き直った。

花壇にはたった一種類、黒ずんだ実を付けた植物が生い茂っていた。臙脂色の庇の下、扉は開け放たれている。

拳を握り、前に進んだ。

どっと体内に流れ込んできた臭気に、私は思わず咳き込んだ。強すぎる甘さは不快なものではない。薔薇というよりは寧ろ、熟しきり腐り落ちた果実が発しているような、それはひどく暴力的な香りだった。

滲み出てきた涙を拭う。背後では扉が独りでに閉まり、ばたんと大きな音を立てた。霞の中に閉じ込められたような気分だ。

躓かないようゆっくりと洋服棚の横を過ぎ、ブティックの最奥まで歩いていく。部屋の左端には丸みを帯びた巨大な影が等間隔に並んでいる。視界はすこぶる悪い。

爪先がなにか固いものにぶつかる。正面に顔を戻すとすぐ目の前にマネキンがあった。シート一枚で作ったような簡素な衣服を纏い、目蓋を下ろして直立している。頬にはやはり小さな亀裂が入っていたが、それを除けば、青年の造形は半年前からまるで変わってはいなかった。

声をかけあぐね、触れるのに躊躇し、かといって背を向けることも出来ず、私はマネキンを見上げていた。そもそも意思を持たないということは、……何に対しても興味を抱かず、強く望むことをしない者は、果たして生きていると言えるのだろうか。彼は生きているのだろうか。もはや私が何をしようと、無意味なのではないかと思った。

気配を感じて振り返る。香炉の煙が渦を巻く。どこかへ消えた棚の代わりに、一人の女がそこにいた。

「いらっしゃい」

肥えた身体を肘掛椅子に沈めたまま、マダムは赤い唇を吊り上げた。私は咄嗟に床を見て彼女との距離を確かめる。大股三步分、それに摺足二歩を加えても、あまりに心許ない。

女は芋虫のような指を細かく動かし、膝元の衣装に橙色のタグを縫いつけている。その間も私から視線を外さない。足先から頭頂まで、舐めるように観察する。

ふうん、という溜息一つに怖気が走る。吞まれてしまわないよう身体に力を漲らせ、背筋を伸ばし、胸を張る。

「欲しいものがあって来たんだろう」

マダムは出しぬけにそう言った。

「格好のことで、町の奴らに散々言われていた筈だ。うちの服を持っていないのはお前だけだから」

縫ったばかりのタグを示し、肌が粟立つような声で笑う。

「注文をお言いよ。なんなら一から仕立ててあげたっていい。美しいものが欲しいならいくらかも用意しよう」

貪るように装飾品を買い漁る人々の姿を思い出し、私は首を振った。彼らに受け入れられるための服なんて要らない。

マダムは無然とした顔で立ち上がった。横にも縦にも大きな影が天井までゆらりと伸びる。

「所有が価値に繋がるんだ。物を持たなきゃ誰もお前のことなんか認めやしないんだよ。この町

で暮らして、それがまだ分からないのかい。金がないなら他のもので購えばいい。それが昔、そうしたように」

その言葉に閃くものがあつた。私は人差し指をマネキンに向け、それをそのまま口にした。

「彼は何を望んだんです」

部屋に満ちる香りが更に強まった気がした。暗く響く声。

『注目されたい』、『褒めそやされたい』、そう言つたからそうしてやつた。『生きた証を残したい』、そう言つたから叶えてやつた。今じゃあ誰も聴かなくなったが、それでもこいつの声は絶えない」

背筋が冷たくなつていく。鉄錆塗れの機械が流すあの歌声は、彼のものか。

女は茂みのような睫毛を瞬かせ手を広げた。膨らみきつたその身体は、ゆったりとした衣装によつて余計に大きく見える。裾を引きずるその音は、巨大な芋虫の蠕動を思わせる。弛んだ顎を動かして、望みを言えと私に迫る。

背中に軽い衝撃。逃げられないことを悟る。壁に張り付いた私は、マネキンの背と女の笑みとを交互に見比べた。

かつての彼の言葉を、そしてそれを叶えた女の言葉を、繰り返す。『注目されたい』、『褒めそやされたい』。それはこの町に住む全ての人の願ひだったろう。……けれど私は、購えるものだけでそれを叶えようとした彼らとは違う。

意思が身体を熱くする。一步踏み出し壁から離れ、力を込めて宣言した。

「何も要らない。私には、あなたに求めないといけないものなんて何もない」

切った啖呵は甘い霧の中に溶けた。それを吸い込んだ女の顔はばんばんに膨れあがり、尚且つ憤怒と憎悪とで歪んでいる。その醜怪さに全身が総毛立った。

私は身を低く屈め、出口に向かって走った。女の脇をすり抜けたところで思い切り躓き、右肩を強かに打ち付ける。

爆ぜるような音を立て、マネキンが崩壊した。無数の破片となった身体は暖色の光を受けて円形の舞台に降り注ぐ。台の上を跳ね、ばらばらと木床に散らばった。

立ち上がろうとした瞬間、鋭い痛みが走った。大きな破片が左脛脛に食い込んでいる。悲鳴を押し殺し、引き抜いたそれは石膏の塊だった。赤く濡れた断面はぎざぎざと尖っている。

熱風が私の頬を打った。おぞましい笑みを浮かべ女が私に手を伸ばす。肥え太った芋虫が頭をもたげて近付いて来る。咄嗟に、力いっぱいそれを払った。破片を握ったままの右手で。

女の骨肉は驚くほど容易に切れた。第一関節から先の部分があっさりとすっ飛び、壁にぶつかっただけとりと落ちた。

そしてそこから溢れだす、どろりとした橙。いつか見た半透明のそれではない。粘性を持った液体だった。女の体液が表面を滑ると、木床は金に変わっていった。眩く美しいその輝きは今や恐怖の対象でしかない。

無様に身体を転がし、橙から逃れる。女は未だに笑っていた。ゆらゆらと左右に揺れながら近付いて来る巨軀。出口に向かおうと必死で足掻くが、左足を貫く痛みに身体は更に強張って、な

かなか立ち上がることが出来ない。

伸ばした指先が陶器に触れた。未だに煙を吐き出し続ける巨大な香炉を、衝動的に両手で掴んだ。膝を床に付けたまま女に向き直り、ありったけの力で投擲する。

汗で手元が狂い、陶器は目標に当たることなく金板の上でただ砕け散る。しかし女の表情は変わった。

言葉こそ発していないが、驚愕と苦悶がない交ぜになった様子に手応えを感じる。私はなんとか立ち上がり、壁に並ぶ陶器を壊していった。

一つ目、女が獣のような声で吠えた。二つ目、橙の進行はいつの間にか止まっていた。三つ目を手に取る。女の身体が先ほどよりも萎んでいるのに気付く。その発見の分だけ、両腕を振り下ろす動作が遅れた。

浮遊感は一瞬。衝撃と激痛が立て続けにやってきた。首が思い切り前後に触れ、わずかに呼吸が止まる。掌と膝とを床につき崩れそうになる身体を支えた。

けたたましい哄笑が響く。咳き込みながら、私は重い頭を持ち上げる。視界のぶれは徐々に消え、ようやく扉に叩きつけられたのだと知った。

割り損ねた香炉は輪を描くように転がって、私の傍に戻ってきた。右手を伸ばせば引き寄せられるだろう。そして反対側の手を伸ばせば、金色の取っ手に届く。

女の様子を伺う余裕はなかった。言葉にならない声をあげ、力を振り絞る。
ぼろぼろの身一つ、出口の先へ飛び出した。

その勢いのまま数歩進んで、そこでとうとう膝が折れた。ばあん、と爆ぜるような音。振り向かずとも、あの空間が閉じられたと分かった。きっともう追われることはない。

白い路地には斜陽が注ぎ、温かだった。風にそよいだ髪が傷口に触れてちくりとした。他に大きな怪我などいくらでもあるのに、何故だかそれが気になった。

私はへたり込んだまま、ぼんやりとアーチの向こうを眺める。幻影のような町からは無数の黒がわき出して、一度雲のような塊を作り、そして散開した。

夕焼け空を食い荒らすように、鴉は飛ぶ。徐々に動きは緩慢になり、高度は落ちて、やがて力尽きたように町の影に呑みこまれていく。一羽、また一羽——そして最後の黒点が墜ち、沈む間際の太陽が一際強く輝いたとき、「町は死んだ」と私は思った。

頬を這うざらついた感触に、私は目を覚ました。犯人を持ちあげて毛布の海に置いた後、大あくびしつつ右目を擦る。ぐっと伸びをし、悲鳴を上げた。眠気も吹き飛ぶ痛さだった。

「おおい、起きたか」

薄闇の向こうで野太い声をする。隙間明りに手を差し入れ、私はカーテンを開いた。恩人の後頭部を見ながら控えめに声を出す。

「今起きました。ごめんなさい、ぐっすり眠ってしまっ

「いいって。……まだ最寄りの都市までだいぶあるから、眠っとけ。着いたらすぐに医者だろうが。寝る暇ないぞ」

こちらをちらりとも見ず、男性は無骨な手でハンドルを操作している。私はもう一度頭を下げた。このぶっきらぼうな毛皮商には、何度感謝してもしきれなかった。

昨夜あの町を出て一時間もしない内、私は煌々と輝くヘッドライトを浴び、そして拾われた。都市から都市への生活の中、軍用車両を改造したというこの四駆があああの辺りを通りかかることは、ほとんどないらしい。本当に運が良かったとしか思えなかった。

彼と出会わぬまま荒野を彷徨い続けても、あの壊滅した町に留まっても、いずれは飢えて凍えて死んでいただろう。恐らく、この温かな生き物も。

私は足元でじゃれる子猫を掬いあげ、顔を寄せた。柔らかな毛が鼻先をくすぐる。思わず頬が緩んだ。……本当に、いつから傍にいたのだろうか。「そいつも連れていくかい」と彼に尋ねられるまで、存在にすら気付かなかった。

奥に引っ込みかけた私を、商人が呼びとめる。

「それにしてもさ、おねえちゃん！」

「え、あ、はい」

「暗くて周りなんざ見えなかったけど、あの辺りって、なーんにも無かったような気がすんだよなあ。……おねえちゃんさ、何処から出てきたっだったっけ」

怪訝そうな男に、私は元いた町の名を告げた。「やっぱり、知らねえなあ」とそれだけ言って、

恩人はまた前方に集中する。
今度こそ布を閉じた私は、温かな闇に三角座り。胸に小さな命を抱いて、左足の包帯をそうつと撫でた。

(文学部歴史学科四年)

さいわい
幸ノ奥津城

かわひらい

ある処に一人の男がいた。男は六ヶ敷い表情で、村と村とを結んでいる寂れた山路を歩いていった。

男はほとんど厭気がさしていた。それは何か特定のものに向けられた感情と云うよりは、まるでこの現世の全てに向けられているように思われた。

彼の事を知る隣人は、そんな彼の仄暗い感情の幾らかを読み取ったのか、少し気分転換をと、彼に酒精アルコールと女を勧めた。男は素直に助言に従ってみたが、駄目だった。強い酒精を流し込んでみても、眉目良い女を買ってみても、彼の鬱屈した思いは微塵も晴れることはなく、むしろ堆積していくばかりで、彼は愈々、生まれ育った土地を捨てた、と云うのも彼は、顔見知りが彼に心配げに接してくれることに対する申し訳なきが、どうしても堪らなかつたのだ。

それからは、行く宛もなく放浪を続けていた。目的がある訳ではない、この旅路は何処まで続くのか、底方はあるのか、それは男自身、判然としなかつた。

峠を越えて暫くすると、路は二股わに岐れていた。男は少し迷ったが、より人の寄り附かなそう

な路を選択した。その路は山路と云うよりは獣路と云った方が適切で、山肌はごつごつとして歩き難く、そこここに長さを異にした下草が伸びていた。葉群が空を覆い隠し薄闇を投げ掛ける。蒼穹はずっと遠くになってしまった。

男は僅かながらに不安を覚えたが、それでも引き返そうとはせず、下草を踏み踏み歩きながらどんとと先を行く、すると急に視界が展けた。

どうやら溪間に出たらしく、目の前を涿々と川が流れている。

男は足許を取られないようにと自然下を向いていた面を、ちよいと上に傾けると、いつの間にか湧いたのか、厚い雲居が空に蔽さるようになして、拡がっているのが判った。一雨来そうだ、と思う間もなく、ぼつりと鼻の頭を雨粒が打った、かと思うと雨はざあざあ降り始めた。

山の天候は移ろいやすいと云う。空気の流れが平地に比して複雑になりやすいと云うのがその理由であると云われている。

男はどこか雨を凌げる処はないだろうか、と四囲を窺えば、そこに丁度、今にも倒壊しそうな破屋あほらやが建っていた。

こんな処に、屋が建っていることを男は訝ったが、山中に居を構える山人なる奇特な人種が居るらしい事も、耳にしたことがあった為、さてはそれに属する者の住まいなのだろうかと思いついた。

何故、山人は態々、山に居を構えるかと云えば、世俗を厭ってそれらとの関係を断つためにと云うのが主だった理由であると聞き及んでいる。里人である自分が訪ねても、突っぱねられるか

も知れない。しかし、ここから次の村に至るまでには未々、時間が掛かりそうである。駄目で元々、突っぱねられたなら、その時にまた思惟すれば良い。

男は氣持ちを固めると破屋の戸を叩く。男の中で、山人のイメージと云うのは、偏屈な壮年、或いは老年の男であったが、予想に反して、応えいの声は女の、それも張りの利いて若々しい。

「おや」

戸が滑り、そこから顔を出したのは、やはり若い女で、彼女は男の姿を見て、驚いたような声を出した。

年の頃は十八、九と云った処だろうか。色素の薄い肌が浅黄色の襦袢の襟から覗いているが、しかしそれは不健康の頭れと云うよりも、女の元々の体質なのだろう、その証拠とでも云うように、着崩した衣の向こうにあるのは肉置きしおの豊かな肉体で。

「済まないが、少しでもだけ屋根を貸して欲しい」

男がそう云うと、女は氣安く了承した。

外観から受ける印象よりも、不思議と小屋の中はしっかりとしているように思われた。雨漏れがあるでもなく、隙間風が吹き込むでもなく、少しの間、休む分には申し分のないものと思われた。

「そんな処に突っ立ってないで、おあがんなさいな。濡れたまんまじゃ身体に障る。火の側で身体を暖めると良いさ」

女の言葉に従って、三和土で履き物を脱ぐと、濡れた着物をどうするか暫時、思案したが、こ

の場で脱ぐのも躊躇われたので、結局そのままにすることにして、男は囲炉裏の側に腰を下ろした。

女はそんな男の様子をその円く開いた瞳をちょいと上目遣いに一度見て、それから火箸を手に取り、火の工合を確かめる。

不用心なものだと云うのが女に対して、不躰にも男が抱いた最初の印象だった。それからどこか微茫として、現実味が希薄していると思った。どこからその感じを受けるのか、男は尾籠を承知で視線を巡らせてみる。と、直ぐに得心に至る。屋内は女の、生活観を全く窺い知ることが出来ないのであった。全体としてござっぱりと纏められた種々の調度は、まるで急に拵えたかのようにならぬ余所余所しく、緊張を孕んでいるような印象を受けた。

まだ、その頃のこの邦では自然の息吹が人間の営みを圧して、あった。地方ではその傾向は顕著だった。未踏の地の多く残された土地では口碑口伝の、奇々怪々の噂話——それは例えば宇治の橋姫のような——が幾つも存在した。男は不意に、その中の一つである、人を喰らうと云う鬼の噂を思い出した。それは男の生まれ育った土地で流布していたものだった。

人里離れた山奥には、鬼の住まう洞穴があり、人間がうっかりその洞穴に踏み入ってしまったら、忽ち鬼の餌食になるのだと、確かそんな話だったかと、男。

しかし、ここは深い山奥でなければ、洞穴でもない。それに何より、目の前の女は人々の口の端にのぼる鬼の姿とは似ても似つかない。

緩んだ前身頃から覗く肌は、新雪のように柔らかく在りながら、強く冴える白を裡に湛えてい

て、その白が男の網膜にざつ、と像を結ぶ。すると、どうだろう。男の中に今まで感じたことのない感情の起伏が生まれる。

上臈が目の前で着物の帯を外し、衣を剥いで、とうとう産まれたままの姿に立ち返ったのを見た時には、ただただ男の中に空洞が拡がるばかりで、欠片も欲情しなかった。いたたまれなさだけが後から後から押し寄せて、男は堪らなくなつて閨から遁げだした、そんな男の心の絃を爪弾く指がある。

女の身体は、男の眸にひどく扇情的に映った。確かに女には欲情を煽るだけのものがないとは云えなかつたが、それでも、そこらの娼妓の身体付きの方が雌として優っているだろう、が、その娼妓をして煽ることの出来なかつた男の欲情を女はいとも容易げに、撲り、起こそうと云うのだ。

女には特別に、男を惹き付ける要素があるとはとても思われなかつた、しかし、現に女の、火の赭を溜めた白磁の肌を見た時、男は衣の向こうの女の裸を想起したし、そして感じたことのないような、焦燥感にも似た欲情を覚えずにはいられなかつた。

一度意識し始めると、感情は手綱を無くした暴れ馬のよう、独りでに加速していくばかりで、男の目は女の姿に釘付けになっていた。露骨とも呼べたその視線を、女はともすれば気づいていだらうが、さして気にした様子もなかつた。

ふわりと、女の身体から立ち騰る薫香がある。肉欲を煽る艶治な肉体がある。

男の裡に颯風が吹き荒れる。気分は嫌が応にも高まって、黒々とした感情がのそり、頭をもた

げる。それは肉置きの豊かな肉体を汚したい、壊したいといった暴力的で獣じみた衝動であって、自分の昂揚の裏に、その不穏な機微を気取った男は慄然として、思い出したように、慌てて理性で抑えつけようとした、と云うのも人の矜持から。

今ここで衝動に任せて襲ってしまえば、人々の噂にのぼる鬼そのものようではないか。

男は己にそう強く云い聞かせ、自我を強く保つことに努めた。しかし、ほんの僅か、それこそ瞬刻でも、気を弛めてしまえば途端に理性が瓦解して、己の裡に潜む獣性の赴くままに女を蹂躪するのではないかと、そう男が思い詰めてしまうのも無理はない、女の発する気配は其ほどまでに淫蕩で、そして何より不しだらで。その淫靡な気配は発矢はしと男の心を掌握していた。

しとどと、間断なく降る雨は、地を濡らし、屋を濡らし、塵芥を洗いさらっていく。比して、男の裡に溜まりつつある澱はその色合いを濃くしていく。

雨垂れの織り成す調べも、今はどこか無機質で空々しい響きを打つばかりで、重たい沈黙と相まって、男の獣性は愈々高まって、噴火寸前の火山のよう、今か今かと爆発の時を窺っていた。

この手に余す欲望に男が戸惑いを覚えたのは、彼の人となりの顕れであっただろう。

慇懃。堅気。彼を形容するならそのような言葉になろう。しかし、そんな男をしてなお、暗い劣情に駆りたてる風情が目の前の女にはある。

今、裡に感じているこの身を焦がさんばかりの疼きは、どうしたことだと云うのだろう。判らない。

「もし」

思料に耽っていた男は唐突に上がった声に驚いて、振り向いたら、ぱちり目が合った。

長い睫毛が瞳にふっさり笠を掛けて、瞳に影を、そして奥にある透徹の黒は、上質な黒蜜のよう、蕩けるような甘さを含んで男の心の絃にねっとり絡み付く。

女は男の裡なる動揺なぞ知らぬ存ぜぬ、その美なる表情を莞爾と、笑顔と呼ばれる表情に変えれば、忽ちに男の動揺は高まる。

「……何だろうか」

それでも、出来る限り平静を装い言葉を返した男には立派の一言。並の男ならとうに理性の箍が外れていたであろう蠱惑の前に、男は唐突に昔を思い出したと云う。結果としてそれが男の理性の紐を今一度しかと結んだのだった。それは、束縛と名附くるほどの強い力だった。

——記憶。男の最初の記憶は山々が翠の階調を作り、琥珀を帯びた陽射しがすぐ側を流れる小川の水面で砕けて、きらきら反射していた、そんな景色を木々の作った影から二人並んで眺めていた。隣に立った女子は自分よりも幾ばくか上背の高い、髪をお団子にして、安物の簪を刺していた。繋いだ手から伝わるのは快さ、安心。彼女は男の姉上だった。

男の二親は彼の幼き頃に鬼籍に入り、爾来、姉上が代替として彼を育てた。彼の人柄はそんな姉上の教育の賜物だった。

その姉上も彼岸へと旅立った。それが今からおよそ一年前の出来事だった。

どうして今さらになって辛い過去を思い出したのか。思い出さぬよう努めていたと云うのに。口の中に苦いものが拡がって、男は思わず顔をしかめた。

男の様子を女は恍惚と、執拗に眺めて、それからゆっくりと話を切り出した、その内容は突拍子もない。

「お前さん、桜の花は好きかい？」

「桜、というとあの、春頃に咲くと云われる？」

男は物怪顔で女を見る。一方の女はこれが真剣な話だと云うように鹿爪らしい表情を作り、それでいて前身頃のはだけたのをさして気にした様子もなく、僅かな挙措でちらちらと、向こう、白が扇情的に見え隠れする。

「そう、その桜さ」

女は應揚と頷く。

「……どう、だろうな。好きか嫌いかは判らぬが、あれが美しいのは確かだ」

男は桜の花弁を脳裡に思い浮かべる。自然と浮かんだのは小夜の、静謐の中に佇む桜で、ふっくら膨らんだ蒼つばきから、艶やかな薄桃が、藍色に染め抜かれた大気の上に繙かれ、そして、出来上がった色彩に月明かりが輪郭を優しく添える。云ってしまえば、其れだけの単調な景色、しかし、それ故に隙がなく侵し難い、完成された情景で、いっそ幻想的でした。

「しかし、またどうしてそのような話を」

男が疑問に思ったのも無理はない、切り出す話としては時節柄、適切とは思えない。今はもう直に雨の続く季節が訪れようと云う頃、既に津々浦々の桜の花弁の大半は散って、これからは次第に葉の緑が艶やかに空隙を埋めていく処で、幻妖の花弁が咲き乱れるのはまだまだ先の話。

女は男の疑念に直ぐには応えずに、一度、腰を上げると、部屋の隅へと、そこに置かれていた行灯の油の工合を確認して、灯心に火を灯す。ほうと、柔らかな光が室内に灯る。

行灯の灯りが、揺れている。光の届かない処では闇が凝って、ある。不思議なもので、灯りが闇を照らせば照らす程、却って闇の存在が強く感ぜられるものだ。

男は不意に、背中に寒気を感じ振り返るも、そこには何も変わった処はなく、決まり悪く居住まいを直し、女を見る。

「そうさねえ。では、咲かない桜の話はご存じで？」

女は差し向かいに坐ると話を切り出した。

「咲かない桜、とな。それは単に枯れているだけなのでは」

「そうであつたらまだ良かったんですけどねえ。咲かない、と云うのは少々語弊があつて、眞実、咲きはするのさ。ただ」

女は一拍置いて、

「その桜が咲く時、どこぞの里の誰ぞかが、行方を眩ますんさね。まるで、初めから居なかつたように、跡形もなく」

そう云つた、口許には興がうっすらとひかれている。

「失踪した人間を捜していると、いつもは咲いていない桜が咲いている。そんなことが何回か続いたそうで、いつしか誰かがこう呼ぶようになったのさ。黄泉の桜と」

男はとんだ与太話だと、笑い飛ばそうとして、結局、口を閉ざした。

男は見た。それは不思議な光景だった。

桜が咲いていた。八重桜。薄桃の花弁が、ひらりひらり、藍の中で遊んでいる。花弁は月明かりを鋭く反射して、それはさながら回り灯籠のよう、その中にとりどりの光景を映し出す。男が映る。女が映る。皆、一様に満ち足りた表情を浮かべている。桜の花弁の一枚一枚は誰彼の見ると、男は気取る。

ふっ、と蠟燭の灯りが消えるように、刹那、光景は霧散した。男は元の破屋で、女と向かい合っている。

「どうしたのさ、呆けて」

「いや、何でもない、はずだ」

「おかしな人さね」

くつくつ、喉を鳴らして笑う。

「それで、何の話だったか……、ああ、そうだ、咲かない桜の話だったな。だが、もしもそんなけつたいなものがあるのなら、さっさと伐ってしまえば良からうに、どうしてそうしない？」

「それは簡単な話さ。桜の樹が誰も何処にあるのか知らないんだからね」

「知らない？ そんな訳ないだろう」

男は口疾に言う。

「いいや、ところが真個ほんごなのさ。正鵠を射るなら、忘れてしまう。桜の樹が何処にあるのか、誰も彼も忘れてしまう。記憶に残るのは、枯れていたという事実と、咲いていたという二つの事実

だけ」

「それは面妖な話だ。しかし、あることには変わりないんだろう？ 見掛けた時に判らないものなのか？」

「そこがまた不思議な話で、例え黄泉の桜を見掛けたとしても、普段は気づきもしなんだと。意識の片隅に、置き捨てられる。そして、咲いた桜を見て気づくんさ。これが、黄泉の桜だ。でも、ほんの少し、時間を置けば忘れてしまう。不思議と立ち枯れた樹、それから不自然に咲き乱れた花弁の記憶だけを残して、忘れてしまう」

女は話を終えると傍らに置いていた火箸を再び手に取った。

男は不思議な心持で、ぼんやり、その光景を眺める。

桜。姉上と手を繋いでいた、あの日の景色。傍らに佇立していたあれば、記憶違いでなければ、これもまた桜の樹だったはず。あれば、咲いていただろうか。少なくとも、枯れてはいなかったが、それでも、あの樹に可憐な花弁がついていた記憶は、なかった。

どうにも、落ち着かない。心がふらふら、手前勝手に歩き、現在いまという一つ処に落ち着いてくれない。

そして、ゆらゆらと。彼の心がさ迷った先は、過去。

雑多な調度が乱雑に積み込まれた、離れの蔵の、一角。そこが幼時の彼の全てだった。陽の光も届かない、黴臭く、埃かぶって。

姉上が口に含んだ粥を、彼に与える。親鳥が、雛鳥に餌を与えるように。

龕がんや座敷牢と云った暗いものを想起させるような稠密と闇が重ねられた空間に、その水音だけが淫らがましく響く。

そして、夜になると、二人は寄り添いあって眠りに落ちた。

姉上の行為を拒む拒まないもなかった。それらは全て愛情に発露したものだと思えば、素気すげなくするのも憚られた。彼は、彼女に全てを委ねていた。そうすると、安心だった。彼女は決して自分を悪いようにはしない。

やがて、男も成長して、物事に一定の分別がつくようになった頃、ようやく外の世界へと連れ出された。その頃になると、男も自らの境遇について幾らか理解を得ていた。

姉上は地元に住まう地主の離れを間借りする代わりに、家主の身の回りの世話をしていたのだ。尤も、男にその意味の持つ暗い事情まではこの時はまだ知りようもなかったが。

とにもかくにも、この時分から男を取り巻く環境には変化が生まれた。

暗闇に泥ぬりんだ男の目には、久方ぶりの外の世界は鮮烈で、何もかもがまるで新しく映った。

夜も覚めやらぬ頃に蔵を出て、しんと冷えた清冽な空気の中に身を投じ、やがて空が白々と、朝の風情を漂わせ始める。男は東の空を望み、すると山の頂の向こうから、金鳥たいようの円い輪郭が次第に顕になる。それから少し遅れて、姉上が蔵を出てきた、その気配を男は背中で感じ、振り返ると、姉上は眩しそうに目を細め、男の存在を淡い輪郭の中に認めると、莞爾と笑い掛ける。男は幸さいわいと云うものがどのような形をしたものなのか判らない、判らないけれども、あの頃の自分はそれに近い処にいたのではないかと、思う事が度々あった。

ばかりと、何か爆ぜる音がして、過去へと遡っていた男の意識は再び現実へと引き戻される。女が手に持った火箸で、囲炉裏をつついていて。どうやら正気附くまでに、ほんの数瞬しか経っていないようだった。

外は変わらず雨が頻りに降り続けている。男は気附くはずもなかったが、この時、雨は溪間にあるこの場所を中心にして起こっていた。

それからしばらく、無言の時間が流れる。

気の詰まるような沈黙に身を置いていると、置き火でしかなかった劣情が途端に氣勢を取り戻す。

男は、時折、女の方を窺っては、その甘なる蠱惑に打たれてを繰り返していた。

「姉さんは」

火箸を置いて、おもむろに女が形の良い唇を開いた、その内容に男は顔を叩かれたような衝撃を受けた。

「お前さんの事をたいそう好いていたんだねエ」

「何を」

云ってるんだ、と続くはずの男の言葉は女のものに被せられた。

「違うのかい？」

女は面を上げて、男の顔を見据える。円い透徹の眸が男を射る。

男は思わずたじろいだ。水を浴びせられたように、得体の知れない怖気が背中を這いずった。

女は男の様子をどう解釈したのか、少し眉間に縦皺を寄せた、稚気のある仕草。しかし、今、男にはそれすらも何か悪意が感ぜられて。

「そう固くなるんじゃないよ」

女は困ったように云った。

男は反駁しようとして、言葉を探したが、見附からない。開きかけた口を今一度結ぶ。

女は男の顔を正面から見ている。落ち着かない。心が平衡を逸していく。知っている、と男は思った。何を。判らない。判らないが、心に感応する何かがあった。

男は固く固く、拳を握った、それは無意識の裡に。

非時ときが固い大地を割って伸びていた。撓しないだ枝の先にはほんのりと、柔らかい白色をした花が慎ましげに咲いていて、幽ゆかに香を放っていた。男はそれを打ち仰ぎ見ている。姉上がそっと、傍らに立った。

男は、これは何と云う名前の樹なのか、姉上に訊ねた。姉上は、これは非時と云うのだと答えた。

男はいつしか姉上の上背に追い附いていて、不図ふと、横目に彼女を窺ってみれば、丁度良い塩梅に表情が判る。彼女は樹を見上げて恍惚とした表情を浮かべていた。

非時は永遠の象徴——だと、知ったのはそれから暫く後のことだった。姉上はそこに何を見出だしていたのだろうか。

「永遠なんてエのは、幻想さ」

女は確信に充ちた口調で断言した。

男は黙ったまま、硬い表情で女を見た。まただ。女には男の心の裡が透けて見えるとでも云うように、彼の心象に対して適切な言葉を返す。

「だけれども、裏を返せば、幻想の中には永遠さえもある、と云うことさね」

女はそう云うと、莞爾と笑った、その姿が在りし日の姉上のものと重なった。

男は目を瞠みはって、身を退いた。

女はつと、音もなく拡がった距離を詰める。衣の裾が床板をすべる。

男の視界に女の面が、姉上の面差しを裡に彫ったその顔が、拡がる。

男は堪らなくなつて、頭を抱えるようにして俯く。

女の声が耳朶に届く。

「坊」

懐かしい響きを打つ。それは、今はもう聞くことの叶わないはずの声で。

ううと、男は愈々真個に、頭を抱えて苦悶の声を漏らす。

「苦しいのかい？」

心配げに語り掛ける、甘やかな吐息。

目の前に居るのは、見知らぬ女の筈、造形が別段似通っている訳でもない、なのにどうしてこんなにも、懐かしいと感ずるのだ？ どうして、どうして彼女の中に姉上を見るのだ！

「淋しかったのかい？」

女は重ねて問い掛ける。

「姉、上」

男はとうとう、堪えきれなくなった。一度、口にしてしまうと、今まで心のずっと奥底で燻っていた思いが沸々と、表層へと騰がってくるのを感じた。

女はそんな男の様子を静かに見守っている。そして、掛けた言葉もまた静かに空気を漂って、男の耳に届く。

「愛しているよ、坊」

愛の言葉を囁いた、嗚呼、忘れるはずもない、覚えのあるその声で。

愛していると云う言葉を姉上はよく口にした。抱き合って眠った夜には、彼女はひしと痛いほどに彼を抱き締め、決して離そうとはしなかった。冬は未だしも、夏の日でもそれは変わらなかった。換気の悪い蔵の中は蒸し暑く、湿気に富んで、痩せた肌に汗の玉がぼつぼつと浮かんで、胸の間に線となって流れるのを、男は間近に見ていた。

それから姉上はよく笑っていた、柔らかに微笑んでいた。それは混じりけのない清んだ笑顔だった。

二親が時疫で身罷り、此岸に二人残された、二人分の食い扶持を確保するのも、考えるだに骨が折れただろう、しかし、彼女は不満一つ漏らさなかった。

——話は少し横路に逸れるが、臘月の一日の深更のことだった。男は寒さで目を醒ました。蔵の固い地面から身を剥がすと、蔵の入り口が細く開いていて、どうやらそこから隙間風が入

り込んでいるようだった。それから、隣で眠っていた筈の、姉上の姿が四辺あたりに見当たらないことを不審に思い、姉上を捜しに男は蔵を出た。

吐息は一度白く固まって、それからほろほろと崩れて景色に溶ける。鋭い寒さが男の肌を刺す。風の音が嫋嫋と聞こえている。

空には玉兎つきが丸い輪郭をして、冴え冴えと銀色を輝かせていた。その明かりに導かれるように、男は母屋の方へと、そして、或る一つの部屋の前で足が留まる。

向こう、障子に映った影がある。影は一定の間隔で躍動している。

男は無意識に、そっ、と足を殺し、細く開いた隙間から向こうを覗き見た、僅か一枚隔てた向こう、そこに拡がる光景に男は息をするのも忘れ、見入った。思えば、男女の交わりをこの目に見たのは、その時が初めてのことだった。

閑話休題、左右とかく、姉上は男のことを一心に思っていたには違いない。それは一片の疑いを挟む余地もないだろう。

「……違うのだ」

しかし、男の言葉はそれを否定した。

「姉上の寵愛が息苦しかった？」

「違う」

問を置かずに絞り出したその声、痛切な響きを打って。記憶の底に沈んだ思い、まざまざと刻まれて。

笑っている。記憶の中にある姉上はいつだって莞爾と微笑んでいる。

笑顔の似合う、女だった。

「……違うのだ」

笑っている。彼女はよく笑っていた。それから、早暁の澄みきった景色の中で小鳥が囀るよ
うに、愛の言葉を囁いた。

男は寵愛を一身に受けて育った。それは確かに過ぎた側面もあっただろう。

しかし、男は頭を振るのだ。行き場のない感情を持って余し、打ち震えるのだ。

何故。どうして。

男は否定の言葉を口にする。さにあらずと。では、無垢に幸であったかと云うとそうでもない。
もし幸であったならば、今こうして苦渋の表情をつくるはずもない。

笑っていた、その顔を、男が言葉でもって表すとすると、必要なのはただ一言で、それは。

「……忌まわしい」

口から転び出た言葉は、呪詛のよう、黒々とした感情が滲んでいた。そして彼は、とうとう人
としての最後の一線を越えた。

男は女を組み伏せる。馬乗りになって、平手で頬を横に打つ。女の顔が横ざまに弾ける。続け
て、もう一度、今度は反対の頬を。容赦のない、力に任せた殴打。ややあって、玉肌に痛ましい
緒が浮かぶ。

しかし、女は耳を聳するような悲鳴も立てず、かと言って屹きつと男を睨ねめつける訳でもなく、漣

の如く静かに、穏やかに、ともすれば白痴とも取れかねないような優しいような優しげな笑みを浮かべ、男の顔を見据えるのみで。

そんな女の態度は、鞆のよう、彼の裡で黒々と燃え猛る瞋恚の炎に酸素を供給した。業、と更に炎は氣勢を増して、男の裡で渦を巻く。

男は女の衣を剥いた。衣の上からでも判る肉置きのいい肉体が一切、露になる。

行灯の灯りに浮かぶ乳白色の身体。婀娜として彼を幻惑せしめた肉体は、間近に見ると、何故か月足らずの少女の危うさをも秘めているように思われた。それはまるで、成熟と未熟、更には夢と現と云った相反する二つの相が一つの体に宿っているかのような、掴み処のなかった。

「気に入らなかつた、ずっと！」

男は叫ぶ。裡に秘めた思いを。

「あの人は俺を一人の人間として見てはいなかつた！」

男は肉体を貪る。ただただ、本能の赴くままに。

「あの人間にとって俺は、物でしかなかつた！」

男は泣いていた。哭いていた。何故、こんなにも哀しいのだろう。

笑っていた。姉上は良く笑っていた。けれど、彼は知っている。その笑顔は彼に向けられたものではなく、自らの作り上げた作品に対して、匠が云いような陶酔を抱くのと一つも変わらない。

そう、姉上にとって男は、決して一人の尊厳を有した個などではなく、一つの作品としての価

値しかなかったのだ。それを知った時の男の絶望と云ったらなかった。

彼女は男のことを名前で呼んだことはない。彼女の論理では、父親の附けた名前で男を呼ぶことなどは彼女の美的信仰に背く蛮行であり、赦されざる行いだった。

彼女は彼のことを、坊、と呼んだ。然るべき時期が来るまで、名を附するに足れる時が来るまで。まだ、早い。まだ、早い、と彼女は舌嘗めずりしながら、彼が其処へ至るのを待っていたのだ。

それから、彼女は弟である男の体をよく求めた。脚を撫で、腕を嘗め、首筋を噛み、そして愈々堪らなくなつて、乳房の間あひに男の顔を迎え入れる。

「ああ。私の坊」

そう云つて、頭を撫でる。髪をかき分け、額に口附けする。私のものだ、と烙印を捺すように。偏執狂。嗚呼、彼女は確かに狂っていた。病的なまでの執着が、せめて彼に向かつていたのなら、まだ救いはあつたらう、転び転びつ、行けるとこまで二人共に墮ちていけばいいのだから。しかし、彼女の狂気はそれすらも赦さなかったのだ。

姉と弟。なんと白々しい言葉だろう。なんと虚しい言葉だろう。

それでも、男は一縷の望みを、その姉と弟と云う言葉縁よすがとして、憎しみと共に抱えながら、彼女の正気附くのを待ち続けた。その心根すら彼女の執着の賜物であつたと云うのは何とも皮肉な話だが。

けれど、結果として、彼の願ひは聞き届けられることはなく、一年前、姉上は鬼籍に入った。

彼と云う未完の作品だけを此岸に遺して。

姉上が逝ってしまった。そうして、男は思い知ることになる。

虚無としか云いようがない、深く、黒い穴が胸に穿たれていた。

亡者になってなお、姉上は彼を掌握していた。

彼が姉上の心根を感じ取った時には、彼の心はすっかりと姉上へと傾いてあった。そこにあの裏切りである。男は思いをそのまま憎しみに転ずるしかなかった。

一縷の希望と無間の絶望の狭間で、男は揺れていた。しかし、その間はまだ良かった。感情の色はさて置いても、男は確かに生きていたと実感を持って云えたはずだった。けれども、姉上はまもなく逝ってしまい、男は心を向けるべき矛先を永久に喪った、その時を持って、恐らく男の大事な、魂とでも云うべきものも同時に喪われたのだろう。それからは空洞の日々が続いた。鮮やかに彼の心を躍らせた、あれだけの景色も、今は嘘のように色を喪い、乾いてしまった。最早、この現世に彼の心を打つものはなくなっていたのだった。

……どれ程の時間が過ぎたのだろう。いや、そもそも自分は何をしていたのだ。感覚が希薄だ。何やら自分の周囲に膜が張られているようだった。

男は頭を振った。すると、僅かながら感覚が戻ってくる。

男は見覚えのない破屋の中にいた。男の傍には、一つの屍体が転がっていた。

瞬間、男は理解した。そして、高々と笑った。喉を天に垂直に突き立て、唾を吐くように、聞き苦しい、獣じみた、勝利の咆哮だった。

目の前にあるのは彼の姉上の屍体だった。そうだ。俺はこの手で殺してやったのだ。ぼたぼた、と。手の甲から滴る赤黒い液体、生命の残滓を男は舐めあげる。その味に、堪らない歓喜を覚える。

それから、零れた涙が床板をぼつぼつ、細く哀しげな音を立てて打つ。男はそれを抑えきれなくなった歓喜が、玉となって現れ出でたのだと解釈することにした。いや、そう解釈するしか自らを正当化することは出来なかったと云った方が適切か。

身体中が云い様の無い充足感に浸って、重くなる。感覚が再び鈍麻していく。

その様子を見知らぬ女が見ていた。男も女を見返す。女はとてもこの陰惨な場に相応しいとは思えない、柔らかな表情を浮かべていた。

「良いさ、私が全てを赦そうじゃアないか。あんたのその気持ちも、何もかも」

男は言葉の意味を考えようとして、直ぐに思い直して、止めた。もう全てがどうでも良くなっていた。あるのは満足と、そして身の回りを取り巻いていた全ての柵しがらみが消えた後、一つだけ至純として彼の裡に残された、それは名を附するとしたら、愛と呼ばれる類の感情であっただろう。

思い思われていた姉と弟。それは歪で、決して報われることのない一つの形だった。

そして、男は絶命した。

女は今ほもう動くことはない男の胸に、触れる。男の最期の顔は満足気でありながら、それでもやはり哀しみの切れっ端が見えるようである。

女は男の目尻を掬う。彼女の眸には無いはずの雫が見えていたのかも知れない。

「人間ってのは、つくづく不幸な生きもンさ。自然の中にあつて不自然にしか生きられないんだからね。なまじ智恵ちえをつけたせいで、些細な幸せを得るために多大な我慢を強いられるなんて、哀しい話さね。だから、せめて夢の中でくらは幸せにありなよ」

そう云つて、女はどこか自嘲めいた笑みを浮かべると、男の身体を抱きかかえ、闇に溶けて消えた。破屋もいっしか消え失せて、後には川のせせらぎだけが聞こえていた。

澄ました顔をした玉兔が、煌々と耀いている。地上に降りた光は大氣を流れては不浄を洗う。依稀として不気味に空気が凍てついた空間があった。そこには一本の枯れた桜の樹が、まるでこの現世から忘れ去れたようにぼつねんと立っている。今、その立ち枯れた桜の樹から、さああと、黝あせく滲んだ夜そのものを裂くように、何の前触れも感じさせず、薄桃の花弁が狂い咲いた。それは不自然としか云いようがない光景で、現世の理から遙か隔たっていた。

季節外れの、八重桜。その根は、人間の心の間隙へと潜り込んで、精髓を得ては穢れなき花弁として昇華する。美しき望みは勿論、醜い願望、欲望、それすらも諾うて。

小夜、月明かりを浴びて闇の中に佇む様は成る程、まるで美が結晶して形をとったように美しく神秘的で、どこか神さびた情緒さえも放っていた。

今、腹に孕んだ新しい魂を、愛おしむように、哀しむように、憐れむように、はらりはらりと、花弁が一枚二枚と散った。花弁は月明かりを反射して、夜の闇の中に銀色が炯と冴える。刹那の銀なる瞬き、その中には、寄り添い立つ幼き二人の童子の姿が固く封されていた――

それは落魄した魂の奥津城。

軀は、桜の樹の下で夢寐する。それは醒めることない無窮の夢。仮初めの現実の中で、彼らは永遠を生き続ける。哀しくはない。寂しくはない。何故なら、その夢はどこまでも優しく彼らを包みこんでくれるのだから。まるで母の胎内にいるように、温かく。今宵もまた、桜の花が狂い咲く。

(薬学部薬学科四年)

鳴沢くんの恋人

吉川 真悟

色のない服をびしょと着込んだ集団が、ぞろぞろと建物の中に入っていく。その足取りは一定で、とても機械的な動作のように見える。凍えるような寒さが、人々の動きを鈍らせているようだった。これだけ寒いならいっそ雪でも降ってくれないと割に合わない、などと勝手なことを思いながら、わたしは列に加わる。

普段は耳が痛くなるほどしゃべるクラスメイト達も、今日は唇を震わせながら沈黙していた。泣いている人たちもいる。客観的な自分に少し嫌悪感を抱いた、そして、みんなが泣いている、という事実に対して涙をこぼしそうになる。みんなの中から液体のようにこぼれ出た悲しみが、どんよりと広がって、わたしの中にも入ってこようとしているのだ。

なんだか気だるい。広大な砂漠の砂の中でもがいているようだった。

遺影の中の鳴沢くんは、笑っているような、馬鹿にしているような、困惑しているような、不思議な顔をしていた。いつもそんな顔をしていたんだろうか。記憶をたどってみようとしても、全然思いだせなかった。そもそも、こんなに彼の顔をまじまじと見たのは初めてだということに

気がつく。まるでテレビで芸能人を眺めているような感覚。今ここに、鳴沢くんという人がいて、わたしという人がいて、向かい合っているわけではない。鳴沢くんは、もうあの場所から出てくることができないのだ。

みんな泣いている。彼を失ったことを悲しんでいる。逃れられない喪失感の中で苦しんでいる。お坊さんの読経が始まった。わたしは顔を伏せた。みんな顔を伏せている。鳴沢くんを直視できないのかもしれない。泣いている顔を誰かに見られたくないのかもしれない。担任の藤田先生は、顔をぐちゃぐちゃにして泣いていた。顔を伏せていてもそれがわかるくらいの有様だった。普段から感受性の強い人だったから仕方がない。あるいは、教師になって一年目で起きたこのショックな事件に混乱しているのかもしれない。

読経は終わり、喪主の挨拶が始まる。前に立ったのは髪の毛の長い女性だった。鳴沢くんのお母さんだろう。その姿はひどく儂げで、ぎりぎりのところで倒れないようにこらえていた。

鳴沢くんのお母さんは、何の紙も見ずに、ぼそぼそと何かを喋り出した。涙は出ていなかったが、泣いているようにか細い声だった。上手く聞き取れない。なんとなく、目を背けたくなるような光景だった。足が痺れたような居心地の悪さを感じる。

なんとか気を紛らわせたくて、鳴沢くんの遺影を眺めていると、唐突に話が終わった。聞えていなくても、それが文脈的に破綻した終わり方であることは明らかだった。思わず視線を彼女の方へ向ける。

鳴沢くんのお母さんは立っている。どこかを一心に見つめながら立っている。わたしはそれを

直視できなくなり、目を背けた。あまりにも露骨に目を背けてしまったため、なんとなく自己嫌悪にとらわれる。

会場がざわつき始める。わたしはいたたまれない気持ちになる。早く彼女を楽にさせてくれ、わたしたちの目の届かないところに連れて行ってくれ、そんなことを無意識のうちに考えている。見てもらえないんだ。

鳴沢くんのお母さんは、数人の男の人に連れられて、壇上から降りた。

それでもやっぱり、どこかを見つめていた。

まるで何かを探しているようだった。

葬儀から一カ月が過ぎていた。

みんなは当然泣き止み、前に向かって進んでいる。ただし、忘れたわけじゃない。ただ見ないようにしているだけだ。立ち直るってそういうことだと思う。だから藤田先生の笑顔はどこかひきつっているし、男子たちはバカ騒ぎをしようとしなない。

わたしの席の斜め前、教卓の真正面にある鳴沢くんの席には、きれいな花が置いてある。忘れたいけど、忘れたくない。そんな思いがこもった花だ。だけどみんなが、早く席替えをしたいことを、わたしは知っている。彼の席を見たくないから。

クラス話し合いで、新しい委員長はもう立てないことにした。今まで鳴沢くんがしていた仕事を、副委員長であるわたしがするだけだ。

鳴沢くんはいい学級委員長だった。彼のことが嫌い、という人は少なからずいたし、別にリーダーシップがずばずば取れるわけでもなかったけれど、二年五組は彼の出すオーラのようなものでいつも過ごしやすい雰囲気か漂っていた。その穏やかなまなざしを向けられると、なぜかこの人に迷惑をかけてはいけない、という気分になるのだ。藤田先生なんかよりずっと説得力のあるまなざしだった。だからきっと、彼はいい委員長だったのだと思う。

对象的に、わたしはひどい副委員長だった。そもそも学級経営の仕事らしいものは、ほとんど全部鳴沢くんがやってくれていたので、わたし自身に副委員長という自覚がなかった上に、そんな優しい鳴沢くんのことをなぜか好きになれないでいたのだ。きっと可愛い嫉妬なのだろうけれど、そのことが今、わたしを責める。彼を好きになる機会はずっと失われてしまった。

放課後のチャイムが鳴り終わっても、席を立たずにわたしはぼうっとそんなことを考えていた。友達みんな部活に行ってしまった。この夏に管弦楽部を辞めてしまったわたしはする事も無く、最近教室でぼうっとしている。母さんがパートを辞めて一日中家に居るようになってから、あまり家に居たくなくなった。顔を合わせれば喧嘩しかすることがないのだ。

がらがら、と教室の戸が開いた。わたしはびっくりして振り向く。

「あっ…」

バイオリンを持った一年生が、入ってこようとしていた。空き教室だと思ったらしい。練習に使うつもりだったのだろう。

「す、すみません」

謝って戸を閉めようとす。なんだか馬鹿らしくなったわたしは、勢いよく席を立ち、乱暴にカバンを肩にかけて、教室を早足に出た。

その子は、わたしを見た瞬間に口元をひきつらせていた。

知っている子だった。

わたしもバイオリンパートだったのだ。

校門を出てからわたしは急いで手袋をはめ、マフラーを巻く。深緑色のマフラーが、季節相應の冷たい風になびく。

勢いで教室を出てきてしまったが、まだ家に帰りたくなかった。

妹が弟がいればいいのに、いつも思う。そしたら、もっと家庭は賑やかで、ひねり出さなくても会話が勝手に生まれて、食事が楽しくて、家に帰っても気まずい思いをすることもなかったのに。お兄ちゃんやお姉ちゃんは別に欲しくなかった。いたら今よりも家に帰るのがつらかっただろう。最近、父さんとも母さんとも、まともに言葉を交わしていない。少し前までは何も悩まずにその日あったこととか、明日の予定とか話していたのに。何かを誰かに伝えるのがたまらなく億劫になっていた。たぶん、わたしが部活を辞めてしまったのはそのせいだ。音楽がしたくて管弦楽部に入ったのに、音よりも言葉を巧みに扱うことを要求された。結局音楽は目的に過ぎなかったのだ。手段を正当化するための。

できるだけ家につくのを遅らせようと、最大限の遠回りをしながら歩く。どこか寄り道をして

もいいのだけれど、本屋で立ち読みをする元気もCDショップを冷やかす元気もない。わたしのほかにちらほらと下校している高校生以外は、ほとんど誰も歩いていない。

なんとなく空を見上げると、見事なまでの灰色だ。電柱のてっぺんが空と混ざり合っているかのように見えた。雨は降らなそうだけれど、切れ目の見つからない雲は不気味だった。

何の考えもなしに、ただやみくもに歩いていると、完全に人通りの途絶えた、細い道に入りこんでしまっていた。何の用事もなければ絶対に通ろうとは思わない場所だ。小さいころからよく迷子になる子だったけれど、その理由が今更よくわかった。わたしは歩くときに景色をほとんど見ていないのだ。

じっくりとあたりを見回すと、ここが知らない場所ではないことに気付いた。

右手に墓所が見える。クラス全員で一度、お墓参りに来たことがある。

ここは鳴沢くんのお墓だ。

わたしは自然と、墓所へと続く石垣の階段を上っていた。墓石はかなりの数あったけれど、それが鳴沢くんのものかは依然来たときの記憶がはっきりと残っていた。

クラスの人々と来たときは、人でごちゃごちゃしてお墓の形もろくに見ることができなかったけれど、今日は気まずい思いをするくらいははっきりと見える。

美しいお墓だ。墓石も周辺もきれいに掃除されている。ここに、人が一人眠っているのか。

「……………」

なんだか不自然に、青い花が供えられていた。真っ黒な墓石と、その真っ青な花は、どちらも

お互いを引っ張り込みそうなほど激しく主張し合っている。死んだ人に備えるには、少し派手すぎる花だと思った。

鳴沢くん。

もっと彼と話をすべきだったのだ。もっと彼のことを知るべきだったのだ。お墓の前に来て、彼が死んでしまったことに対する実感がわかかなかった。彼がいないという事実の影響する範囲を線で囲うならば、わたしはその線の上にならうと乗っかっていた。まるで木の枝で引っ掛けたような、細長い傷が、痛みもせず腕に残っているようだった。

「…あら」

突然背後で声がして、わたしは飛び上がった。

「あ」振り向くと、鳴沢くんのお母さんが立っていた。葬儀で会ったときよりも幾分かましになってはいたけれど、顔色が悪く、目尻が黒ずんでいる。

「……あなただったのね」

「は？」いきなり合点のいったという顔をされて、じっと見つめられる。わたしはたじろぐ。

「な、何がですか？」こういうときはとりあえず挨拶をすべきだったなあと、怪訝な顔を作ってしまった後に後悔した。

「あなたが、秀一の付きあっていたっていう人でしょう？」

「…え、いや」

「ちょっとお話でもしましょうよ。おうちにいらっしやいな」

「あの、わたし違っ…」わたしの話を何も聞かずに、鳴沢くんのお母さんはわたしの腕をつかんで歩きだした。

この人、まだおかしいんだ。

そんなことを無意識のうちに考えていた自分に気付いて、わたしは自己嫌悪した。だけど、わたしの腕を引く鳴沢くんのお母さんの様子は明らかに普通ではなかった。そんなに強い力で引っ張られているわけではないのに、抵抗することができない。まるで大きな使命を背負っているかのような面持ちで、わたしを引きずっていく。

恐ろしさを感じると同時に、わたしはなんだか申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。この人は、わたしを鳴沢くんの彼女かなんかだと思いついてしまっている。鳴沢くんとなんかまともに話したこともないようなわたしを、だ。

「あの、わたし、違います」勇気を出して、腕を振り払った。「わたし、鳴沢く…秀一くんと付きあってないです」

鳴沢くんのお母さんはじっとわたしの目を見つめていた。お葬式で見たうつろな目とは違って変わって、驚くほど力強い目だった。まるで、わたしの方が間違ったことを言っているのではないかという気がしてくる。鳴沢くんのお母さんはただ黙ってこちらを見ている。何か言わなくては。何か。

「あの…」

「いいのよ、無理しなくても。私には分かるんだから」

それだけ言って、彼女はまたわたしの腕をつかんだ。
わたしは観念した。この人と戦っても勝てる気がしない。

鳴沢くんの家は、なんと一軒家だった。お母さんと二人暮らしをしていると聞いていたものだから、てっきりアパート暮らしだと思っていたのだけれど、連れていかれた先には、うっすらとピンク色のかかった、可愛らしい家が建っていた。塀で囲まれた庭にはバスケットゴールと花壇がある。車は見当たらなかったが、代わりに原動機付自転車とスポーツタイプの自転車が一台ずつ、車庫の中に格納されていた。

バスケットゴールの陰に、割と大きな犬小屋があった。中をのぞくと、茶色い毛むくじゃらが丸まっている。あまり動物が好きではないわたしは、どうかその茶色い毛むくじゃらが起きないようにと祈った。

家の敷地内に足を踏み入れたところで、ようやく鳴沢くんのお母さんはわたしの腕を離れた。「さあ、どうぞ。上がってって」お母さんは少し息切れをしていた。わたしを引っ張りながら、かなり早足でここまで歩いてきたから当然だろう。

ここで帰ることができたはずだった。走って逃げれば簡単に逃れることができたはずだ。実際、掴まれていた腕が解放された瞬間に、全速力で駆けだそうと思った。

ただでできなかつた。

わたしなんかよりもずっと、鳴沢くんのお母さんは、何かに脅え、そして、緊張しているかの

ように見えたからだ。

この人を今ここで放っておいたら、一生後悔を引きずって生きていかなくはならない気がした。別に助けてあげたいと思ったわけではない。ただ、助けてあげられないことをきちんと伝えなければならぬ。

「おじゃまします」わたしは玄関の扉を開けたお母さんに言った。

彼女がわたしに何をしたいのかだけでも、確認すべきだ。

鳴沢くんのお母さんは静流さんという名前だった。

なんだか言われるままにリビングに案内され、なんだか言われるままに出されたコーヒーを飲んでみた。とても美味しいコーヒーだった。

ちょうど二人座るのにちょうどいいサイズの、小さな食卓に、対面して座っていると、なんだか先ほどまでの異様な雰囲気忘れてしまいそうな、穏やかな空気が流れ始める。何よりも、この家の不思議な生活感が、わたしを安心させた。三か月前にこの家の一人息子が死んでしまったなんて、到底信じられないような、人の息遣いの聞こえる家だった。決して散らかっていると、汚れているとか、そういうことではなくて、家具や調度品の一つ一つから、人間がこの家に住んでいて、それなりに幸せに暮らしていたことが伝わってくるのだ。

「そうだ、これ、昨日作ったスコーンの余りなんだけれど、よかったらどうぞ」キッチンから静流さんが山盛りのスコーンを運んでくる。

「あ、ええと、はい、いただきます」わたしはおながが空いていたこともあって、遠慮なく手に取った。ナッツとチョコプレートがまぶしてある。スコーンというよりも、クッキーに近い食感だった。「おいしいです」実際美味しかった。久しぶりにお菓子を食べたけれど、おながが成長に必要なもので満たされる感じがとても素敵だった。

「そう、よかったわ。……で」

「はい？」

「あなたと秀一は付き合ってどれくらいになるの？」静流さんはごく普通のトーンで尋ねてきた。「いや、あの、だからわたしと鳴：秀一くんは付きあってはいなくて……」

「隠さなくていいの。別に悪いことではないんだし。あなたなんでしょう？ お墓にいつもあの青いお花を供えてくれているのは。嬉しかったのよ」

「いや、ですから……もちろんお花を供えていたのはわたしではない。

「まあ、なんとなくあの子に彼女がいるような気がしてたから、全然びっくりはしていないんだけど、やっぱり自分の息子がどんな女性を付き合ってるのかは、女手一つで育てた身としては少し気になるところなのよ。面倒くさいと感じるかもしれないけど、多めに見てやってちょうだい」まるで他人事のように、静流さんは言う。

わたしは体の力が抜けるのを感じた。この人と話していても、わたしの言いたいことは一言も言えず、仮に言えたとしてもきっと伝わらない。やっぱり、鳴沢くんが死んでおかしくなってしまうんだろうか。それとも、もともとこんな人だったんだろうか。

「そうだ、秀一の小さいころの写真とか、見る？」 静流さんはなんて素敵な事を思いついたんだろう、といった大袈裟な表情でわたしを見た。

「えっと……」 さっきから口ごもってばかりだ。

言いたいことがはっきり言えないのを、わたしはこの人のせいに行っているだけではないのか。小さなころから意思表示のできない子だと周りの大人から叱られてきた。

「えっと、見たいです」 わたしの口からは思いもよらない答えが出てきた。

異様な状況に対する恐怖やパニックよりも、好奇心が勝ってしまった。ひょっとしたら、これが鳴沢くんを知る最後のチャンスなのではないかと思ったら、なんだか、深く考える余裕が心になくなってしまったのだ。

「じゃあ、秀一の部屋へ行きましょう」 嬉しそうにそう言って、静流さんは立ちあがった。

鳴沢くんの部屋は小さかった。まるで、サイズの合わなくなった子ども服を無理やり着続けているような、そんな小ささだった。

なんだか二十年くらい前のものに見えるベッドと、小学生のことから使っているであろう学習机、教科書も参考書も小説もマンガもお構いなしに突っ込んである本棚、小さいギターアンプ、小型の液晶テレビ、据え置き型のゲーム機（わたしはゲームには詳しくないのでこれが何という方なのかは分からなかった）、目につくものはこれくらいだ。アンプはあるのにギターが無いのはどういうわけか疑問だけれど。

「狭いでしょう？」　そういう割に、静流さんの声は弾んでいる。

「秀一くんは、小さいころからここで一人で寝てたんですか？」

「ええ。大きくなっても、荷物を運ぶのが面倒だからってこの部屋から移ろうとしなかったの」
変な子でしょう？　と静流さんは笑う。

移ろうとしなかったの。さりげないけれど、過去形だ。鳴沢くんがこの世にはもういないことを、認めた表現だ、意外と、受け入れているのだ。もしくは、受け入れようともがいている最中なのかもしれない。

その作業に、ひょっとしてわたしは巻き込まただけではないのか。静流さんは、わたしを聞き手としてうまく利用することによって、気持ちに整理をつけようとしているのではないのか。そんな考えが頭に浮かんだ。

「ごめんね、適当に座って」　静流さんはベッドの上を指し示した。確かに、それくらいしか腰を下ろせそうな場所はなかった。

「ありがとうございます」　答えながら、わたしはなんだかドキドキしていた。初めて恋人の部屋に案内されたときのような気持ちだった。正確には、状況はわたしを息子の恋人だと勘違いしているおばさんと二人きり、という訳のわからないものだけだ。

静流さんは本棚から一冊のアルバムを取り出してきた。そこまで分厚いものではないけれど、どこか高級感が漂っている、茶色いアルバムだ。

静流さんは、わたしの隣に座った。

「ほら、これが生まれてすぐ」

アルバムの一ページ目を開いて、静流さんが一枚の写真を指さす。しわくちやの猿のような生き物が写っていた。これを見てすぐに「かわいい」という感想を持つことのできる、母親という存在のその本能的な部分に、わたしは感心せずにはいられない。いつか自分が、自分の体内から出てきたこの生き物を見て、「かわいい」と感じる日が来るとは思えなかった。きっとわたしには母性本能というやつが備わっていないのだ。

「かわいいですね」それでもお世辞が言えるのが大人。

「でしょう？ この頃なんかほら、だいぶ人間らしくなってきたに指さした写真は、すっぽんぼんの鳴沢くんが、わけがわからないよ、といった表情で赤ちゃん用の湯船につけられている写真だった。その、物心ついていない乳児とは思えない表情に、わたしは思わずクスッと笑ってしまった。

静流さんがページをめくる。

「幼稚園の頃ね。生誕劇で羊飼いをした時の写真」

かわいい衣装に身を包んだ鳴沢くんが、一生懸命演技用の顔を作っていた。もうすでに、わたしの知っている鳴沢くんの顔がほとんど出来上がっている。そして、その顔は彼の中身もこのころにすでに出来上がっていることを物語っていた。

「こっちは小学校の入学式ね」

次に指さされた写真には、鳴沢くんと、静流さんのほかに、男の人が写っていた。誰だろう、

と疑問に思うまでもなかった。顔が鳴沢くんにそっくりだったからだ。

「この人が」わたしは静流さんの方を見た。「秀一くんのお父さんですか？」

静流さんは答えなかった。それはイエスという答えに他ならなかった。

触れてはいけないところに触れてしまった。後悔が募る。

鳴沢家が母子家庭である理由をわたしは知らない。秀一くんのお父さんは、小学校入学のころには確実に存在したのだ。

「そうよ。七年前に死んでしまったけれどね」

会話を無理やり終わらせるかのように、静流さんは一気にページをめくった。

死んでしまったのか。父親がいない理由なんてどこか別の場所で生きているか、死んでいるかの二択しかないのに、それを面と向かって告げられるとなんだか複雑な気持ちになるわたしは、本当に自分勝手だと思う。

静流さんが開いたのは、中学校の入学式と思われるページだった。学校ではない、この家の玄関で、学ランを着た鳴沢くんがさわやかな笑顔を浮かべて立っている。まるで丁寧に描きこまれた漫画の一コマのような光景だった。

静流さんはわたしに写真の説明をしなくなった。わたしに見せているというよりも、ただただ、写真を眺めている。まるですぐ隣にわたしがいることなんて完全に忘れてしまったかのようにだった。なんだか居心地が悪い。

しばらくは中学校の写真が続いていた。今までよりも段違いに写真の量が増えた。普通、子ど

もが大きくなるにつれて写真は減っていくものだと思っていたので、不思議な感じがする。わたしの家も、わたしが小学校の高学年になったあたりから写真なんてほとんど撮らなくなった。

そんな中学校の写真の中に一枚、鳴沢くんが見慣れない服を着ているものがあった。

「なんです、これ」わたしは指さし尋ねる。

「ああ、これは袴よ」静流さんは、わたしの声で我に返ったように答えた。「中学校で弓道を始めたから、その袴」

「キュウドウ？ キュウドウって弓で矢を弾いてアレするキュウドウですか？」少し考えて、やっとキュウドウは弓道と書くことを思い出す。

「ええ。…高校でもやってたんだけど、知らなかったの？ 同じクラスだったんでしょ？」

「えっと…はい」わたしは情けない気持ちになる。仮に恋人だったとしても、そうではなかったとしても、同じクラスに半年もいた男の子が、しかも委員長で人気者の男の子が、なんの部活に入っていたかも知らないのだ。

「親の私が言うのもなんだけど、上手だったのよ。それに、とっても格好よかったんだから」静流さんは、さっきの重苦しい雰囲気はどこへやら、とたんに弾んだ声を出し始めた。「ほら、この写真なんて、素敵だと思わない？」

一枚、ページをめくったところに、その写真はあった。

鳴沢くんが弓を構えている写真だった。

写真には写っていない、どこか遠くにある的に向かって、狙いを定めている。

わたしは写真にくぎ付けになった。

写真の中の鳴沢くんの目が、触ったら切れそうなくらい鋭かったからだ。人間はこんなに鋭い目をする事ができるのだと、死んだ魚の目をしたわたしに向かって訴えているかのようだった。鼓動ががばくばく鳴り響いていた。

このまま自分は死んでしまうのではないか。

心臓が、わたしの体を引き裂いて表に飛び出してきそうなくらい。

苦しい。

「どうかしたの？」 静流さんが、様子のおかしいわたしを心配して顔を覗き込んでくる。

「いえ…大丈夫です」

わたしはなるべく顔を見られないようにして立ちあがった。

「今日はもう、帰りますね。ありがとうございました」それだけ言ってそそくさと出口に向かう。

「あら、本当に大丈夫？ 気をつけてね」 静流さんはあっけにとられていた。当然だ。わたしも自分で自分が分からなかった。

「あの、静流さん」わたしは部屋の入り口で、振り向かず声かけた。

「はい？」

「また来てもいいですか」

「もちろん」おそらく静流さんは笑顔だっただろう。振り返って確認したかったけれど、できなかった。

顔が真っ赤だったからだ。

写真を見て、鳴沢くんに恋していた。

一目惚れだった。

鳴沢くんのお父さんは、突然蒸発してしまっただけだ。鳴沢くんの十歳の誕生日の一週間前のことだったそうだ。そしてその一ヶ月後、長野の山中で、遺体で見つかった。車の中での練炭自殺だった。彼は一人ではなかった。その車の中にはもう一人、若い女の人が亡くなっていた。その人と鳴沢くんのお父さんがどんな関係だったのかは、結局明らかにはならなかったらしい。ひょっとしたら、男女の仲だったのかもしれない。ひょっとしたら、女の人が一方的に思っていて、無理心中を企て、鳴沢くんのお父さんはそれに巻き込まれただけなのかもしれない。事件はそこが曖昧なまま幕を閉じていた。当時は結構派手にニュースになったようで、ネットで検索したら様々な情報がぼろぼろと出てきた。鳴沢くんのお父さんの写真も、公開されていた。アルバムで見たあの顔だ。鳴沢くんに似た、あの顔だ。

わたしは、放課後学校を出ると、まっすぐ静流さんのところ、つまり、鳴沢くんの家へと向かうようになっていた。

最初は、母親の待つ家に帰りたくないという気持ちの行き場を、ちょうど良くそこに向けただけだった。自分の母親と二人ぼっちにならずにすむのなら、誰の母親と二人きりだろうがどうでもよかった。

静流さんはやはりどこかおかしかった。普通に接している分には特に問題ないのだけれど、ときどき話が噛み合わないことがある。息子の死という非日常の出来事が、彼女を通常の文脈から数ミリだけずらしてしまったようだった。そのずれは些細だけれど、小さすぎる方が逆に目立ってしまう場合だってある。

「不思議ねえ」リビングで、いつものようにスコーンを食べながらお茶をしていると、静流さんが言った。「なんだかあなたって、ずっと前から私の娘だったんじゃないかって思うことがあるの。どうしてかしら」

「わたしも、ひょっとしてわたしは静流さんから生まれてきたんじゃないかって思うこと、ありますよ。こんな一緒にいてリラックスできる人ってなかなかいないですもん、学校の友達とかでも」

「…ご両親とはうまくいっていないの？」

わたしは少し考えて、小さくうなずいた。

「なんだか、他人みたいなんです。家に居ても全然喋ったりしないし、何よりもなんか見るとイライラするんです」

「私はあなたのご両親に会ったことが無いから、何とも言えないけど」静流さんは困った顔をした。ここで、親に向かってそんなこと言うもんじゃないわよ、とかなんとかお説教をしない所が、静流さんのいいところだった。

「静流さんは、親が好きになれないとか、そんな風に感じたことはありませんか？」

「私の両親はもう何年も前に亡くなってるんだけど、二人とも好きだったわね。尊敬してた」
「素敵なお両親だったんですね…」

「別に素敵なんてことなかったわよ。普通の両親だった。良い所も悪いところもあったし、もちろん嫌いなところもたくさんあったけれど、けど総合的に見て好きだし尊敬してたわ」

「じゃあ、きつと素敵なお両親だったんですよ」好きになることができるというだけで、少なくともわたしの両親よりはましに思えた。良いところも悪いところもなかったけれど、嫌いなどろはたくさんある親だ。

「私たちが上手くいってるのは、本当の親子じゃないからかもしれないわね」そう言って静流さんはゆっくりと笑った。皮肉でも何でもない、そのままの気持ちだったのだと思う。

「秀一くんとは、どうだったんですか？ 仲のいい親子でした？」

「そうね、仲がいいかどうかは別として、私はあの子のことを大好きだったし、あの子も私のことを愛してくれていたと思うわ」

静流さんは鳴沢くんのことを話すとき、楽しい思い出話をするおばあさんのような顔になる。

わたしたちはいつもお茶を飲んで、スコーンを食べて、無駄話をして、たまに鳴沢くんのことを思い出した。静流さんの思い出の中の鳴沢くんはいつも素敵だった。

そしてわたしは、ますます彼を好きになっていった。

自分でもおかしいと思う。どうかしている。死んでしまった男の子のことを好きになるなん

て、狂っているとしたか思えない。異常な事だ。

でも否定できない。

わたしは鳴沢くんのが好きだ。鳴沢秀一くんのが、好きになってしまった。

寝ても覚めても、あの写真の、鋭い目つきをした彼が頭を離れなかった。

できれば会いたかった。

会って、話があった。きっとそうすれば、わたしはいつまでだって話をする事が出来た。なんとなくわかるのだ。

けど、この気持ちは一体どこに向かうのだろう。

鳴沢くん本人なのだろうか。

それとも、別の何かなのだろうか。

たまに鳴沢くんの部屋に一人で行って、あの、アルバムの写真を眺めた。何度見ても、胸のドキドキは失われなかった。むしろ、見れば見るほどそれはわたしの中へとずっと入ってきて、心をかき乱した。

学校に居てもそうだった。鳴沢くんの机の上に置いてある花瓶が、今までとはまったく違って見えた。それさえもいとおしく思えた。

そして同時に悲しかった。鳴沢くんはつい数か月前までこの教室に居たのだ。わたしは何度も生きている彼を見たことがある。当然だ。同じクラスだったのだから。それはまるで遠い遠い昔

のこのように感じられた。

クラスのみんなは、鳴沢くんの死をとうとう乗り越えたようだった。彼が死ぬ前のクラスの雰囲気に戻りつつあった。それすらもなんだか悲しかった。彼の死を悲しむ心が、彼をこのクラスに留めていたのに。

それでも彼は変わらずこのクラスの委員長であり続けている。結局まだ、代役は立てられていない。副委員長のわたしが彼の仕事を引き継いでいるとはいっても、まだクラスは彼のものだった。

ただ春が近づいていた。

クラスが変わる。彼の任期が解かれる。

「ちょっと、いいかしら。職員室まで来てもらいたいんだけど」

放課後、帰り支度をしていたわたしに、藤田先生が声をかけた。

「はい」わたしは荷物を机に置いて、先生の後に続いて廊下に出る。委員長の仕事も請け負ってから、先生に呼ばれることが多くなった。鳴沢くんはこんなにくさんの仕事を抱え込んでいたのか、と毎回驚く。委員長なんて形だけのものだと思っていた。

「失礼します」

職員室に入室し、わたしは藤田先生の机へと向かう。

「ごめんね、最近仕事を頼みすぎよね。…やっぱり新しく委員長を誰か選んだほうがいいかしら

ね。委員長と副委員長の兼任なんてちょっとハードワーク過ぎかしら」

「いえ、もう今年度も終わりますし、わたし部活してませんから大丈夫ですよ」わたしは笑顔で答える。本心だった。今更誰かを委員長に任命するのはかわいそうだ。「で、今日はどうしたんですか？」

「ああ、あのね」先生はなんだか言いにくそうな顔をした。そんなにとんでもない頼みごとなのだろうか。「文集を作ろうと思うんだけど」

「文集、ですか？」

「ええ…どうかしら？」

「クラスのみんなはあんまり気乗りしないと違いますけど…」というか、高校生で文集作りに乗り気なやつなんていないだろう。中学生のときでさえ作らなかった。

「そうよねえ…でも、どうしても作りたいの。とてもいいクラスだったと思わない？」

「いいクラスだったとは思いますが…」それには鳴沢委員長の功績が大きかった。彼のその人並み外れた人望と信頼感で、クラスのみんなは美しくまとまっていた。

「でしょう？ きっと何か残しておいた方がいいと思うの。ね、文集、作りましようよ。絶対いつか作ってよかったって思う日が来るから」

「それは先生が、じゃないんですか？」わたしは目を細めて先生をにらんだ。

「まあそうんだけど…いいじゃない」悪びれもせず先生は答える。この無邪気そうな顔を見ると、なんだか力になってあげたくなるから困った話だ。

「じゃあ…今度みんなに話しては見ますけど、あんまり期待はしないでくださいね」

「ありがとう」

先生は満面の笑みを浮かべた。

意外と、クラスのみんなは文集に乗り気だった。正直な話、クラスで一番書きたくないと思っていたのはわたしだったと思う。とにかくそういう面倒くさいのは嫌いだ。きっとわたしが全員分集めて、全員分チェックして、印刷して…考えただけでも頭が痛くなった。

文集の題は『自分の夢』という、ごくありふれたものになった。きっと形として残るなら何でもよかったのだ。こだわり始めたら切りがないことをみんなは知っているから。

その日のうちに用紙を配布し、期限を一週間と設けた。あまり時間はない。

わたしは放課後、鳴沢くんの家に行くと、静流さんに鳴沢くんの机を借りてもいいか尋ねた。

「もちろん構わないけれど」静流さんはちょうど庭いじりをしているところだった。「勉強でもするの？」

「まあ、そんなところでず」適当に答えてわたしは家へと入る。

二階へとまっすぐ向かい、部屋に入ると、ちょっとうきうきしながら鳴沢くんの机に座る。高さは少し高かったけれどまあ調節するほどでもないくらいだ。わたしは自分の筆記具を出そうとしたが、思い直して机の上の、筆入れ代わりに使われているマグカップの中から鳴沢くんのシャーペンシルを取り出した。

「……」

驚くほど手になじまなかった。まるで持つのに適さない木の枝を無理やり掴んでいるかのような違和感だった。シャープペンシル全体からにじみ出ている彼の癖のようなものもわたしとは合わないようで、少しショックを感じる。

原稿自体はさっさと書き上がった。大した分量でもなかったもので、一時間もかからずに仕上がった。内容はでっ上げもいいところだ。そもそも夢なんてない。

リビングに行くとき、静流さんは庭いじりから帰ってきて、台所で料理をしていた。

「いい匂いですね。シチューですか？」

「ええ。今日も晩御飯は食べていく？」

わたしは笑顔でうなづく。最近は毎日ここで夕食までごちそうになっていた。ついつい一人では食べきれない量を作ってしまうからちよどいい、と静流さんは言っていた。

「じゃあ、出来上がるまでポアロの散歩行ってきますね」

「うん、ありがとう」

ポアロはこの家で飼っている犬の名前だ。あれだけ犬嫌いだっなのに、一度ポアロの散歩についていってからは、すごく仲良しになってしまった。今ではわたしの匂いをかぎ取ると、散歩に連れてって尻尾を振ってせがむようになった。

犬小屋に行くと、いつものようにポアロが顔を出してちぎれそうな勢いで尻尾を振り始めた。ふさふさの毛で目が覆われている大型犬のポアロが尻尾を振ると、ぶんぶんと言がする。

ポアロを連れて道路に出てすぐに、誰か女の人とぶつかりそうになった。

「す、すみません」反射的にそう言ってから顔を見上げると、

「あら」

「あ」そこにいたのは藤田先生だった。とても驚いた顔をして立っている。

「どうしたの、こんなところで。ここ、鳴沢くんの家でしょう？」

「あ、いえあの、ちょっと最近お邪魔させてもらって。先生こそ、どうしたんですか？」

まだ驚きすぎていて息が正常にできていない先生は、何度か大きく肩で呼吸した。

「学級文集に、鳴沢くんのページも作ろうと思って。写真を何枚かもらいに来たの。学校で撮った写真にはあんまり写ってなかったから」

「そうなんですか。意外ですね」いつも輪の中心に居るような人だったのに。

「意外でしょうか？ 困っちゃって。…これから犬の散歩？」

「はい。ポアロっていうんです」

「へえ、可愛いわね」先生は笑顔でポアロの頭をなでる。ポアロはくうん、と甘えたような声を出した。「じゃあ、気をつけてね」

「はい」

誰か知っている人に見られたのは初めてだった。見られたら急に、自分のしていることが常軌を逸脱している気がしてきた。

いや、逸脱している。常識では考えられないような行動をとっている。

でも止められない。もう止まることは出来ない。そんなところまで来てしまっている気がした。自分でもどうすればいいのかわからない。

そして、同時に妙な胸騒ぎを覚えていた。なんだかわたしにとってあまりよくないことが起ころうとしている。

ポアロがこちらを心配そうに眺めていた。

鳴沢くんの家に帰りついたとき、藤田先生はもう帰った後だった。

「あら、おかえりなさい。さっきまで藤田先生が来られてたのよ」静流さんがシチューを温めなおしながら言う。

「はい、出かけるときに門のところまで会いました。文集用の写真をもらいに来たって」

「ええ。二階のアルバムから何枚か持って行ってもらったわ。おかしいわね、高校二年生にもなって文集なんて。私が若いころもそんなことさすがにしなかったわよ」

わたしは静流さんの話を最後まで聞いていなかった。いてもたってもいられない。一秒がじれったい。階段を駆け上がって鳴沢くんの部屋へと飛び込むように入り、本棚からアルバムを引っ張り出す。

何枚かページをめくる。ところどころ写真が抜き取られている。

…ない。

弓道の写真がない。

あの、眼光鋭い鳴沢くんの横顔が、アルバムから消えてしまっている。藤田先生が文集のために持っていったしまったのだ。

気付いたらわたしは泣いていた。号泣だった。嗚咽が止まらない。あの横顔が、わたしの手の届かない所へと行ってしまったという不安が胸を締め付ける。失われたわけではない。きっと文集にはあの写真が使われる。そして、二年五組全員の手配に配布されるのだ。考えただけで涙が止まらなかった。

あの写真はそんなことのために使っていないものではない。

わたしの異変に気付いたのか、静流さんが階段を上ってくる音がする。

「どうしたの？ 大丈夫？」あまりにも顔をぐしゃぐしゃにして泣いているわたしを見て、静流さんは慌てて駆け寄ってきた。

「…ないんです…写真…が…」わたしは途切れ途切れに言葉をどうにか繋ごうとした。「先生が…持って行っ…ちゃって」

「大切な写真だったの？」

「…はい…」

「じゃあ、返してもらおうといいわ。秀一の写真は、あなたのものなんだから。…あなたは秀一の恋人なんだから」静流さんの声は優しくかった。

「…はい」

明日、先生のところに行こう。写真を返してもらおう。

わたしは、鳴沢くんの恋人だ。

次の日の放課後、意を決して職員室へと向かうと、藤田先生は不在だった。先生の机の付近でうろろろしているわたしを見て、藤田先生の隣の机の先生（名前を知らない）が「ひょっとして藤田先生待ち？」と話しかけてきた。

「あ、はい、そうです」

「じゃあここにはもう戻らないんじゃないかな。部室見てみたら？ 最近そっちに居ることが多いみたい」

「藤田先生って部活の顧問されてたんですか？」わたしは驚いた。

「あれ、知らなかったの？ あんなに熱心な先生なのに」初耳だった。

「何部ですか？」

「弓道だよ、弓道」その先生は本当に知らない様子のわたしに半ばあきれながら答えた。「自分の担任がなんの顧問してるかくらい知っという方がいぞ」

「はい、ありがとうございます」わたしはそそくさとその場を立ち去る。

弓道部室は校舎とは真反対の、校庭のはじっこに設置されていた。一度靴に履き替えて、わたしは校庭を縦断する。それほど熱心でないくせにやたらと数の多い様々な部活動生が、わたしのことを邪魔そうに見てくるが、全然気にならなかった。

弓道部室は、練習場と控室と更衣室の三つに分かれていた。これはうちの学校の部活の中では

かなり優遇されている方だ。人数四十人越えの管弦楽部でさえ、曜日制で合唱部と音楽室を譲り合いながら使っているのに。

練習場をのぞくと、袴を着た人たちが弓を構えて立っていた。ときどきはしっといという音が聞こえて、いつの間にか矢が的に刺さっている。すごい世界だ。初めて生で見て、改めて実感する。

練習場には藤田先生の姿は見えなかった。控室だろうか。

ノックすると、中から「はい」という藤田先生の呑気そうな声が聞こえてきた。

「失礼します」引き戸をガラガラと開けて、中に入る。

「あら、どうしたの？」藤田先生はわたしを見て軽く驚いたそぶりを見せた。

「ちょっと、お願いがあるんですけど」そう言いながらわたしは周りを見渡す。どうやら、この部屋は控室というよりも顧問室として使われているようだった。明らかに藤田先生の私物と思われるものまで置いてある。

「昨日、鳴沢くんの家から写真を持って行かれましたよね？」

「ええ、何枚か文集用に頂いてきたわ」

「ちょっと見せていただけませんか？」

「いいけど……」藤田先生はカバンの中から茶封筒を取り出して、こちらにはい、と差し出した。

「どうかしたの？」

「ちょっと……」茶封筒の中から写真を取り出して、一枚ずつめくっていく。

あった。弓道の写真だ。横を向いた顔、鋭い眼。

「この写真なんですけど」わたしは写真を見せながら言う。「実は返していただきたくて」

「返してって…それあなたのじゃないでしょう？」藤田先生は訝しげに言った。

「わたしのじゃないんですけど…あの…」また口ごもっている。「あの、わたし、鳴沢くんの恋人で」

「どうして嘘をつくの？」

藤田先生の言葉が、遮断機のようにわたしを遮る。

「…え？」

「あなた、鳴沢くんの恋人なんかじゃないじゃない」藤田先生の目は真剣そのものだった。「どうして嘘をついて、鳴沢くんの家に入りこんだりするの？何が目的なの？」そう言いながらこちらに詰め寄ってくる。

「目的って…そんなものないです」

ちらりと、藤田先生の後ろの壁に、花が立てかけてあるのが見えた。

青い花だった。

「どうして何度も何度もお墓に花をお供えに行って、彼が生きている間にあんなに一緒の時間を過ごしたこの私こそこそしなくちゃいけないくて、なんの目的もないあなたが鳴沢くんの家に入りこんで、恋人を名乗っているの？彼の犬を散歩させているの？彼のお母さんが作ったシチューを食べているの？」

わたしは動けない。

動かし方が分からない。

「どうして彼に愛された私じゃなくて、あなたが恋人を名乗っているの？」
「ばしん、という音とともに、鋭い痛みが頬に走った。」

藤沢先生の手が振り上げられ、そして下ろされたのだ。
わたしは控室を飛び出した。

泣きながら走った。

鳴沢くんの本当の恋人とは、藤田先生だったのだ。彼女が青い花をお墓に備えていたのだ。生きていたころの鳴沢くんに愛され、愛していたのは彼女だったのだ。

静流さんは、そのことに気付いていたのではないのか。わたしはその事実を無理やり捻じ曲げるための、代替品だったのではないのか。

気持ち悪い。気持ち悪い。

言いやうのないどろどろした気持ちだが、お腹のずっと奥の方から、わたしの体を溶かすように這い上がってくる。

何が恋だ。何が一目惚れだ。

自分が気持ち悪い。藤田先生が気持ち悪い。静流さんが気持ち悪い。

鳴沢くんが気持ち悪い。

気付くとわたしの右手には、袴を着た鳴沢くんの写真が握られている。

わたしはそれを丁寧に引きちぎった。
強い風が吹いて、ちぎれた写真がどこかへ飛んでいく。
春がすぐそこまで来ている。

(教育学部中学校教員養成課程国語専攻三年)

選考を終えて

総評 「『書く』ことは楽しいこと」の発見

Ⅱ 東光原文学賞の充実・発展に向けてⅡ

選考委員長 西川 盛雄

熊本大学東光原文学賞は今年で五回目を迎え、その確かな足取りを刻んできている。今回は岩岡中正委員、高峰武委員、そして筆者と三名で審査させていただいた。応募状況は大学院生一人を含む十四名で、内訳は男性五名、女性九名であった。手順は十四編の応募作品のうち附属図書館による第一次選考を通過した八編を各選考委員が精読して四編に絞り第二次選考を行った。その中から最も優れたものに最優秀賞、優れた作品三編に優秀賞が授与される。

選考過程において新しい作品あるいは才能と出会うことは嬉しいものである。読み終わって領かせてくれる作品との出会いは喜びのひと時である。このような出合いを与えて下さった応募者一人一人に感謝申し上げたい。

大賞は選考委員全員が一致して「かんざくら」を推した。作品の骨子となる物語の構成、現実

と幻想の世界の往還、そして桜と蝶が比喩的にもつ美と残酷さのコントラストなど、ここには柔軟な構想力、想像力の発現が見られ、選考委員の高い評価を受けた。

優秀賞は「欲望の町」^{「幸ノ奥津城」}「鳴沢くんの恋人」の三作品でここでの順位はない。それぞれに異なった世界を描きながらも表現者としてのすぐれた力量を示しており、作品は味わい深いものとなっている。

「欲望の町」は近代の都市化に伴って増幅される欲望や虚栄に翻弄される現代人のあり方をテーマとした意欲的な作品と評価された。ブティックでの人間マネキンやグロテスクな女主人など象徴的な人物描写に工夫を凝らし、文明批判的なスタンスを保持して独自の幻想的な世界をつくり上げている。

「幸ノ奥津城」では桜のイメージと姉弟愛の世界を性描写を含む独自の幻想世界を用いて描いており印象に残る。出だしはラフカディオ・ハーンの「青柳ものがたり」に倣ったのだろうか。ただこの小説の結末部分の展開、タイトルの点で違和感が残るという指摘があった。

「鳴沢くんの恋人」では女子の主人公の恋心が男子生徒（鳴沢くん）が亡くなった後に生じるということ、この男子生徒と担任教師との恋愛関係など、揺れる若者の心理を丁寧に描いている点は評価されたが、展開がやや唐突であるという指摘は免れなかった。

他に「万能の喪失」と「ハッピー」が候補にあがった。前者では機械に依存した人間の頭脳をテーマにしているが、文学として読ませる工夫が欲しいこと、後者では家族をテーマとし、擬人法的な手法による物語の展開があったが作品としての説得力にもうひと工夫欲しいことが指摘さ

れた。

今後の課題は応募者数と質の確保にある。「書く」ことは広く文化の継承と創造に関わって楽しいことである。学生諸君には全国的にも貴重なこの東光原文学賞に多く参加していただきたいと思っ

て思っている。

なお、第一回から選考委員長を務められてきた小野友道先生（熊本大学顧問）が勇退され、今回から熊本日日新聞社の高峰武氏を選考委員としてお招きすることになった。東光原文学賞が今後ますます充実・発展していくことが期待される。来年度もさらに多くの作品の集まることを願って止まない。

●西川 盛雄（にしかわ・もりお）

熊本大学名誉教授、熊本大学・学術資料調査研究推進室客員教授。著書に、『ラフカディオ・ハーン再考』（共著、恒文社、1993）、『続ラフカディオ・ハーン再考』（編著、恒文社、1999）で熊日出版文化賞。『ハーン曼荼羅』（編著、北星堂、2008）、詩集『半月』（葦書房、1980）、『ま」とつて』（石風社、1989）、歌集『魚歌喪失』（雁書館、1983）、『風の行方』（砂小屋書房、1995）、熊本県民文芸賞・評論の部一席（1982）。

コメント

選考委員 岩岡 中正

今回は昨年より応募者が少なかったが、選ばれた作品は昨年とくらべて遜色はなかった。それぞれ自分なりのテーマと手法で意欲的に取り組み、それぞれ努力して表現力を高めてきていると思われるが、他方、今回は四年生の連続受賞が多く、今後どのようにして応募者をふやし質を確保するか、これからの課題である。

大賞の「かんざくら」は審査員の全員一致での受賞である。桜をめぐる幻視や生死の問題は昔からよくとりあげられたテーマであって、その点でのハンディはあるものの、これは、大桜の魔力にとらわれた村と村人たちを通して、現実と幻想の世界の往来をみごとに描いた作品である。丁寧で過不足のない筆づかいで、ストーリー展開にも無理がない、読ませる作品である。また、大桜と蝶を美しく描いて、春らしい季節感もあふれている。ただ、主人公とその上司との関係の描き方がやや定型化している点と、結末部分が少し冗長な点が、惜しまれる。

優秀賞の「欲望の町」は、物質的欲望や虚栄に翻弄される現代人の倒錯、疎外、喪失という文明批判の大きなテーマに正面から取り組んだ意欲的な作品として評価できる。しかし、ストーリーの展開と表現がやや生硬だったりパターン化しているところが、惜しまれる。

優秀賞の「幸ノ奥津城」は、桜の幻想性を柱に展開する巧みな作品である。イメージでつなぎ

ながら展開する手法もうまいし、自分で意図的に用いている独得の古典的な文体も、内容にかんがって、効果的である。ただ、姉弟の愛と葛藤というテーマはややありがちだという点、この作品の結末部分とこの作品のタイトル自体がやや分かりにくいという点で、課題もある。

優秀賞の「鳴沢くんの恋人」は、主人公が、亡くなった後に鳴沢くんに愛情を抱いたり、鳴沢くんの母と親しくなっていく点で、ストーリーの展開にやや無理はあるものの、鳴沢くんと担任教師との恋愛関係が明らかになるところなどに意外性もあるし、全体として表現は丁寧で力がある。

その他では、「万能の喪失」は、機械に依存した近未来の人間の頭脳をテーマに、過剰な情報化・機械化の中で人間喪失を批判する意欲的な作品で、アイデアも論旨もいいが、これを、論文ではなく文学として読ませる方法についても少し考えていただければと思った。

● 岩岡 中正（いわおか・なかまさ）

熊本大学法学部教授、俳誌「阿蘇」主宰。(社)日本伝統俳句協会理事。著書に『詩の政治学―イギリス・ロマン主義政治思想研究』（木鐸社、1990）、『転換期の俳句と思想』（朝日新聞社、2002）『石牟礼道子の世界』（編著、弦書房、2006）、『ロマン主義から石牟礼道子へ』（木鐸社、2007）、『虚子と現代』（角川書店、2010）で第11回山本健吉文学賞・評論部門、『子規と現代』（ふらんす堂、2013）。句集『春雪』（ふらんす堂、2008）で、第50回熊日文学賞。『夏薊』（ふらんす堂、2011）。

講評 新しい才能との出会い

選考委員 高峰 武

東光原文学賞の選考会に初めて参加した。

東光原文学賞の創設のいきさつは承知していたし、関心も寄せていたのだが、実際に選考委員の話があった時は、「さてどうしたものか」と思ったものだ。就任への気持ちの後押ししたのは、新しい才能との出会い、ということだった。新しい才能、というのは何も若者固有のものではない。幾つになっても、人は才能を開花させることができる。しかし、若さというものが持つ「エネルギー感」というのは、やはり若者にしかないものだ。荒々しさ、というか、そんな才能との出会いを期待した。未来をつくるのは若者である。それはどんな世界でも共通することだ。

選考会に残った八編を読ませてもらった。一番に推したのは大賞となった「かんざくら」だった。

「桜と死」というイメージは、古来、小説だけでなくさまざまなジャンル、作品で取り上げられている。むしろ、少々陳腐さも漂う、というところもある。しかし、そのことを差し引いても作品自体が持つ物語性が秀逸だった。ひょっとしたら、現実にもこんな密やかな村があるので

ないか、読みながらそんな気持ちになった。言葉が生硬な点が気になった。もう少し整理すれば完成度は高まろう。

優秀賞の三編はそれぞれに味わい深いものだった。

「鳴沢くんの恋人」は、若者の揺れる心を軸にし、ストーリーとしては一応、完成している。文中で、「おや」と思わせる巧みな表現もあったが、一方で、展開がやや唐突に思える部分があった。

「幸ノ奥津城」^{さいわい}は、桜のイメージと姉弟愛を、幽玄とでも呼べる独自の世界の中で展開している点を評価したい。性の描写も含めて古典的な文体も作品の特徴だろう。誤字があったのは残念だった。

「欲望の街」はマネキンを使った展開に工夫の跡があった。文明批評的な意図も強く感じられ、独自の世界をつくっている。ただ、テーマがテーマだけにやや観念的過ぎる点もあった。

あった、ということではなく、こうあったに違いない、ということでも、そこに普遍性があればそれは文学となる。今後の作品に期待したい。こういう賞の持続も貴重なことだ。新しき才能との出会いを熊本の地で実感したい。

● 高峰 武（たかみね・たけし）

熊本日日新聞社取締役論説委員長。早稲田大学第一文学部仏文科卒。1976年、熊本日日新聞社入社。1999年社会部部長兼論説委員、2005年編集局長。2012年から現職。著書・共著に『ルポ精神医療』（日本評論社）、『巨大ダムに揺れる子守唄の村』（新風舎文庫）、『検証ハンセン病史』（河出書房新社）、『報道写真集「水俣病50年」』（熊本日日新聞情報文化センター）、『新版検証・免田事件』（現代人文社）。『連載「ルポ精神医療」』と『連載「検証ハンセン病史」』は日本新聞協会賞受賞。

第五回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇一三年三月三十日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷

